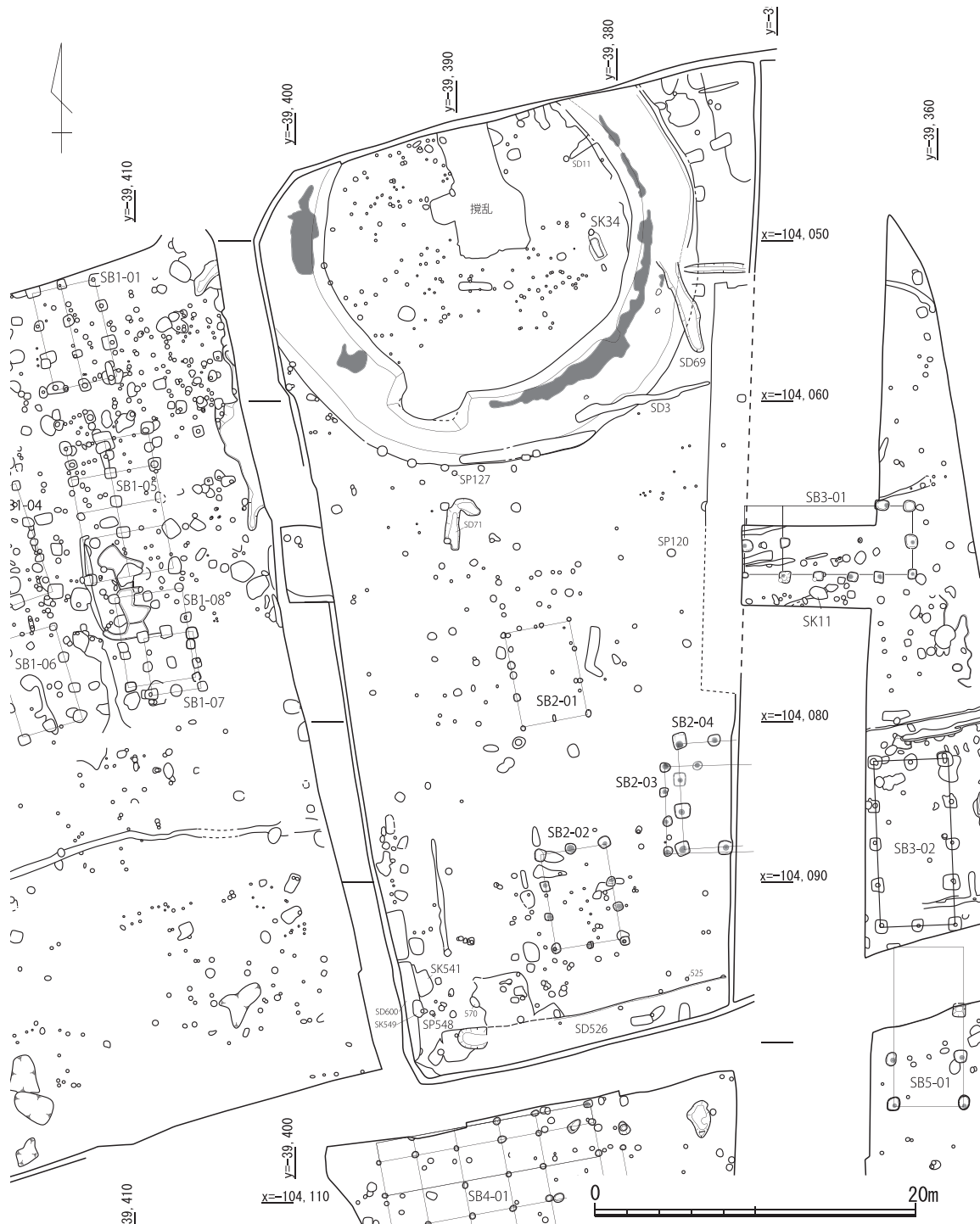


2) 奈良時代以降の遺構・遺物

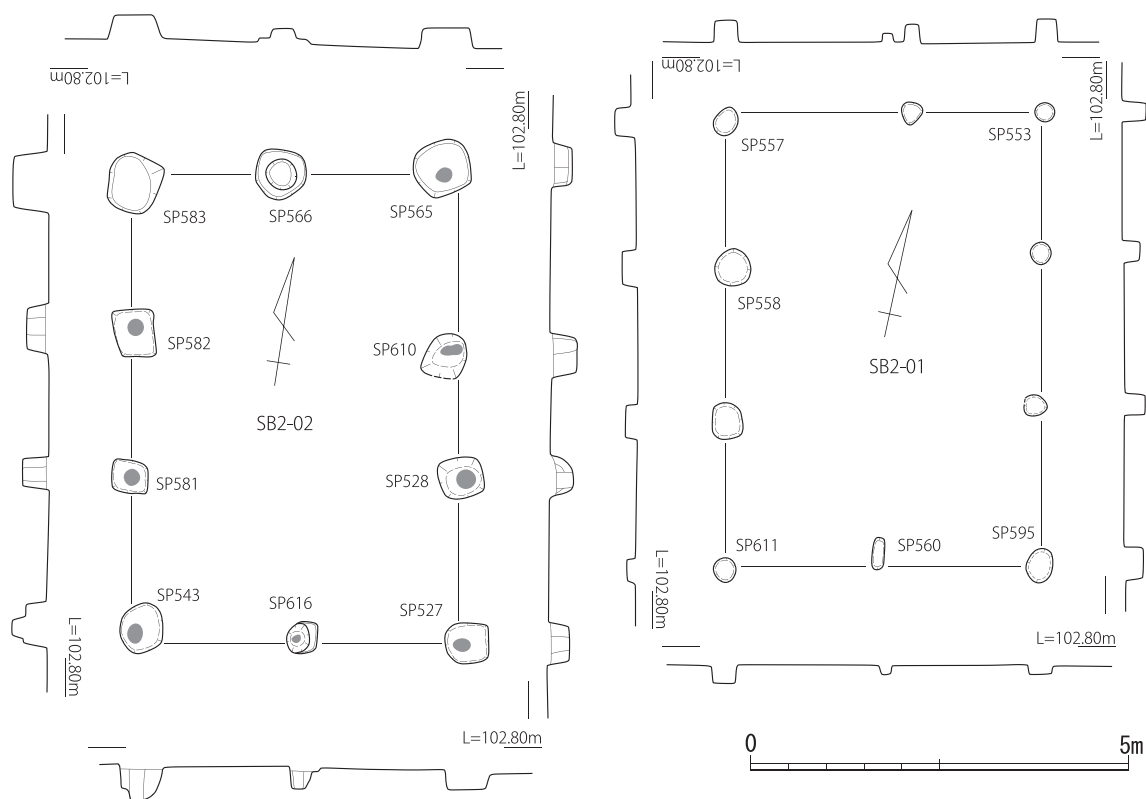
A. 検出遺構

15-2地区では奈良時代以降の遺構として、掘立柱建物跡4棟、溝などを検出した。奈良時代以降の遺構密度は1地区に比して希薄といえる。なお、時期不明の遺構SK34についても、この項で報告を行う。以下主要な遺構について概観する。

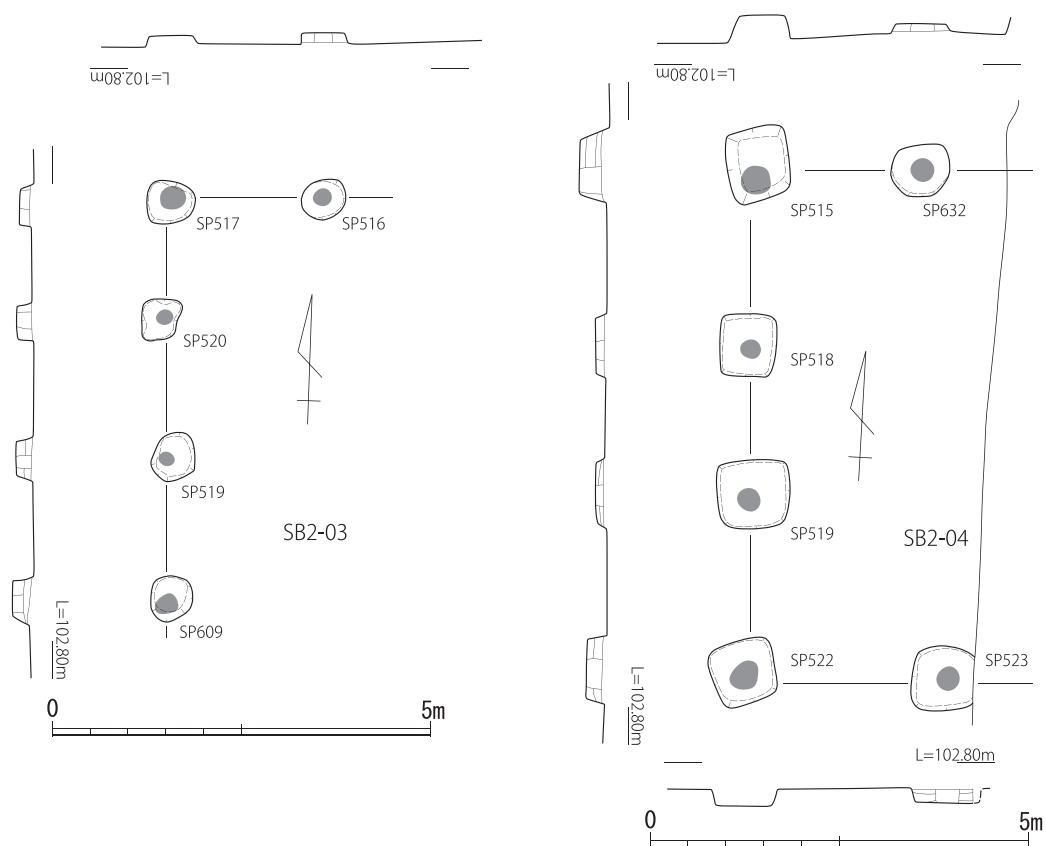
掘立柱建物跡SB2-01(第80図右) 調査地の中央部で検出された南北3間、東西2間の掘



第79図 2地区検出遺構配置図(奈良・平安時代、1/400)



第80図 掘立柱建物跡 S B 2 - 01・02実測図(1/100)



第81図 掘立柱建物跡 S B 2 - 03・04実測図(1/100)

立柱建物跡である。規模は芯々間で南北6.1m、東西4.3mを測る。主軸は座標北から西に振っている。

柱穴は一辺0.3～0.7mの不整な方形を呈する。

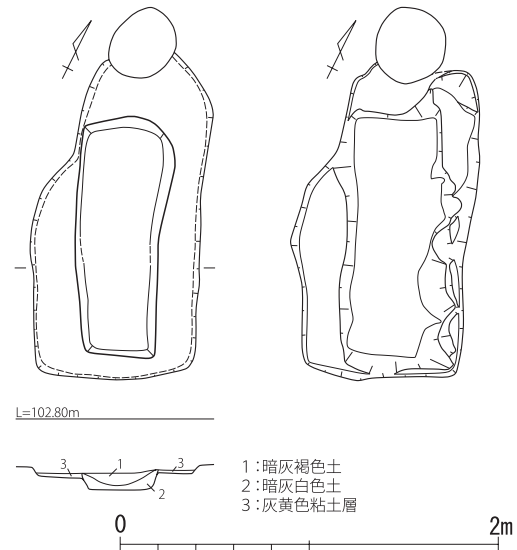
掘立柱建物跡SB2-02(第80図左) 調査地の南部で検出された南北3間、東西2間の掘立柱建物跡である。規模は芯々間で南北6.0m、東西4.2mを測る。主軸は、座標北から西に振っている。掘立柱建物跡SB2-01とは南北に連なって建てられている。

掘立柱建物跡SB2-03(第81図左) 調査地の南東部で検出された南北3間以上、東西1間以上の掘立柱建物跡である。規模は芯々間で南北5.4m、東西2.1mを測る。主軸はほぼ座標北である。

柱穴は一辺0.5～0.6mの不整な方形を呈する。

掘立柱建物跡SP2-04(第81図右) 調査地の南東部で検出された南北3間、東西1間以上の掘立柱建物跡である。規模は芯々間で南北6.8m、東西2.4mを測る。主軸はほぼ座標北である。

柱穴は一辺0.5～0.6mの不整な方形を呈する。



第82図 木棺墓SK34実測図(1/40)

(伊野近富)

木棺墓SK34(第82図) 時塚3号墳の墳丘東肩部で検出された南北方向に主軸をとる木棺直葬墓である。

墓壙の平面形は不整な長方形を呈し、規模は長軸1.7m、短軸1.2mを測る。墓壙は二段墓壙であり、下段に長軸1.4m、短軸0.5m、深さ0.1mの土坑を掘削している。棺はこの下段に据えられており、木棺の痕跡から箱型木棺と考えられる。棺の規模は長軸12.4m、短軸0.5mを測る。棺の幅は北側がやや広くなっており、被葬者は北頭位であると考えられる。

出土遺物がなく、詳細な時期は不明であるが、墓壙が二段墓壙であることから、弥生時代の遺構ではないものと判断する。

(石崎善久)

B. 出土遺物(第83図)

2地区出土遺物として、柱穴や土坑、溝、包含層などの出土遺物を図示した。なお、掘立柱建物を構成する柱穴出土遺物として図示しうるものはない。

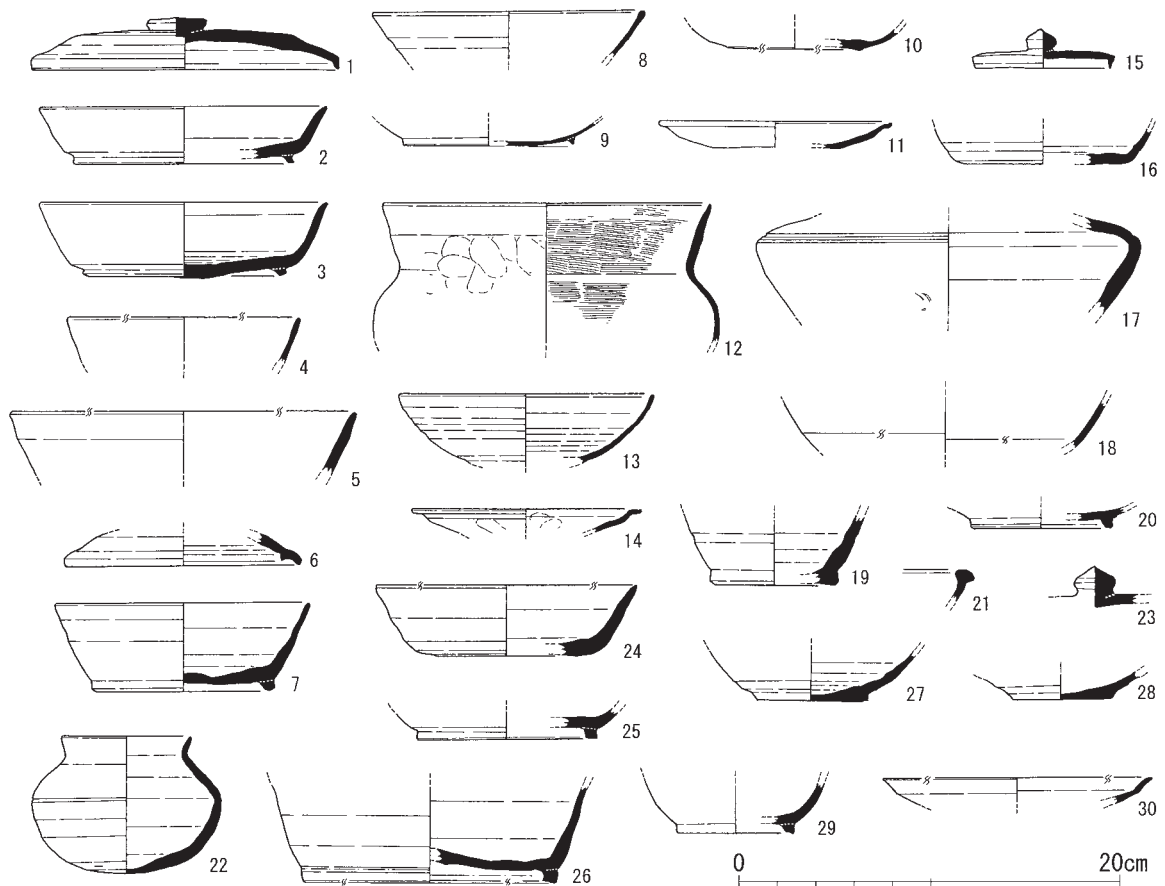
1～3は時塚3号墳周溝内で一括して出土した杯Bのセットである。

4・5はSK541出土の須恵器杯口縁の破片である。

6はSP127出土の杯G蓋である。この地区で唯一の飛鳥時代の資料である。

7はSP120出土の杯Bである。高台が底部外縁にとりつく。

8～12はSP548出土の須恵器碗と黒色土器碗・黒色土器甕・土師器皿である。一括性の高い遺物といえる。



第83図 2地区出土遺物実測図(5)

13・14はS P 570出土の平安時代の碗と皿である。

15はS P 553出土の須恵器壺の蓋である。

16はS P 549出土の須恵器杯Aである。

17は古墳の周溝を削平するS D 3から出土している長頸壺の体部片である。

18はS D 526から出土した緑釉碗の破片である。この溝は南半が調査区外のため詳細は不明であるが、調査区南部を東西方向に横切っており、平安時代の区画溝の可能性はある。

19～21はS D 69から出土した須恵器壺底部、須恵器碗底部、須恵器鉢の口縁部である。時塚3号墳の周溝を削平している溝である。

22～30は包含層から出土した遺物を掲載した。22は須恵器短頸壺である。23は須恵器蓋の宝珠つまみである。24は須恵器杯Aである。25は須恵器杯Bの底部である。26は大型の須恵器杯Bである。27は糸切り底をもつ須恵器碗である。28も同形態の須恵器碗である。29は緑釉の小型碗の破片と思われる。30は緑釉の皿小片である。

これらの遺物には飛鳥時代から平安時代の各時期のものが認められるが、奈良時代後半から平安時代にかけてのものが大部分であり、この地区の土地利用がこの時期を中心に行われたものと考えられる。

(石崎善久)

(4)15-3・6地区

15-3地区は15-2地区の東に設定した調査区である。また、調査の課程で、用水路部分を6地区として追加調査したが、3地区と連続しているため、まとめて報告する。調査区では上層遺構として掘立柱建物跡群や土坑、性格不明のピット・溝を、下層遺構として弥生時代の溝・土器棺墓などを検出した。古墳時代の遺構は検出されていない

1)弥生時代の遺構・遺物

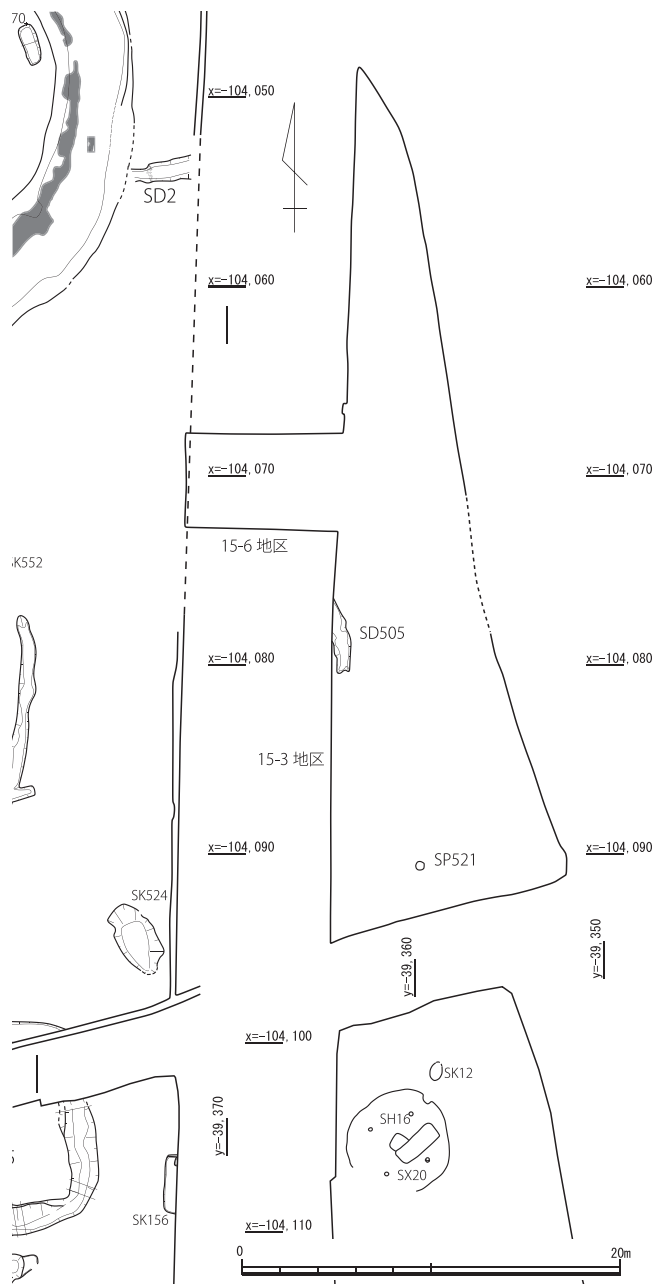
A. 検出遺構

弥生時代に属する遺構として溝・土器棺墓がある。遺構密度は薄い。

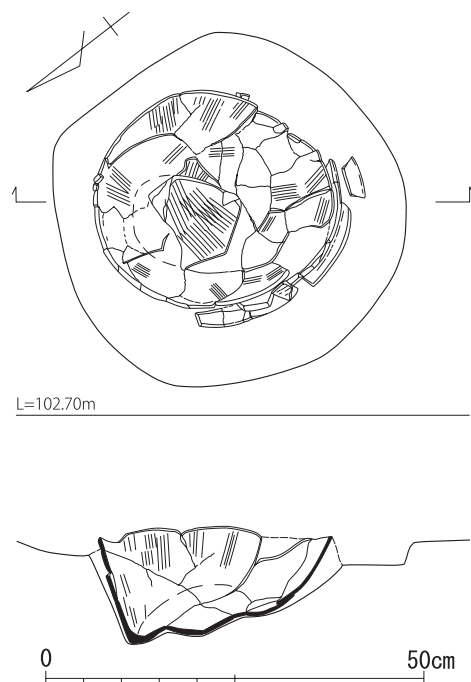
土器棺墓 S P 521 (第85図) 3地区南部で検出した。径0.4m、深さ0.15mの土壌内に甕を正位で据え付けている土器埋納墳である。副葬品や人骨はないが、土器の検出状況から土器棺墓と判断した。

S D 505 3地区中央西壁で検出した溝である。わずかに屈曲しており、調査区より西側に延びる。全長4mを検出した。埋土内からは弥生土器のみが出土しており、須恵器などの混入遺物もなく弥生時代の遺構と判断した。幅1m、深さ0.14mを測る。

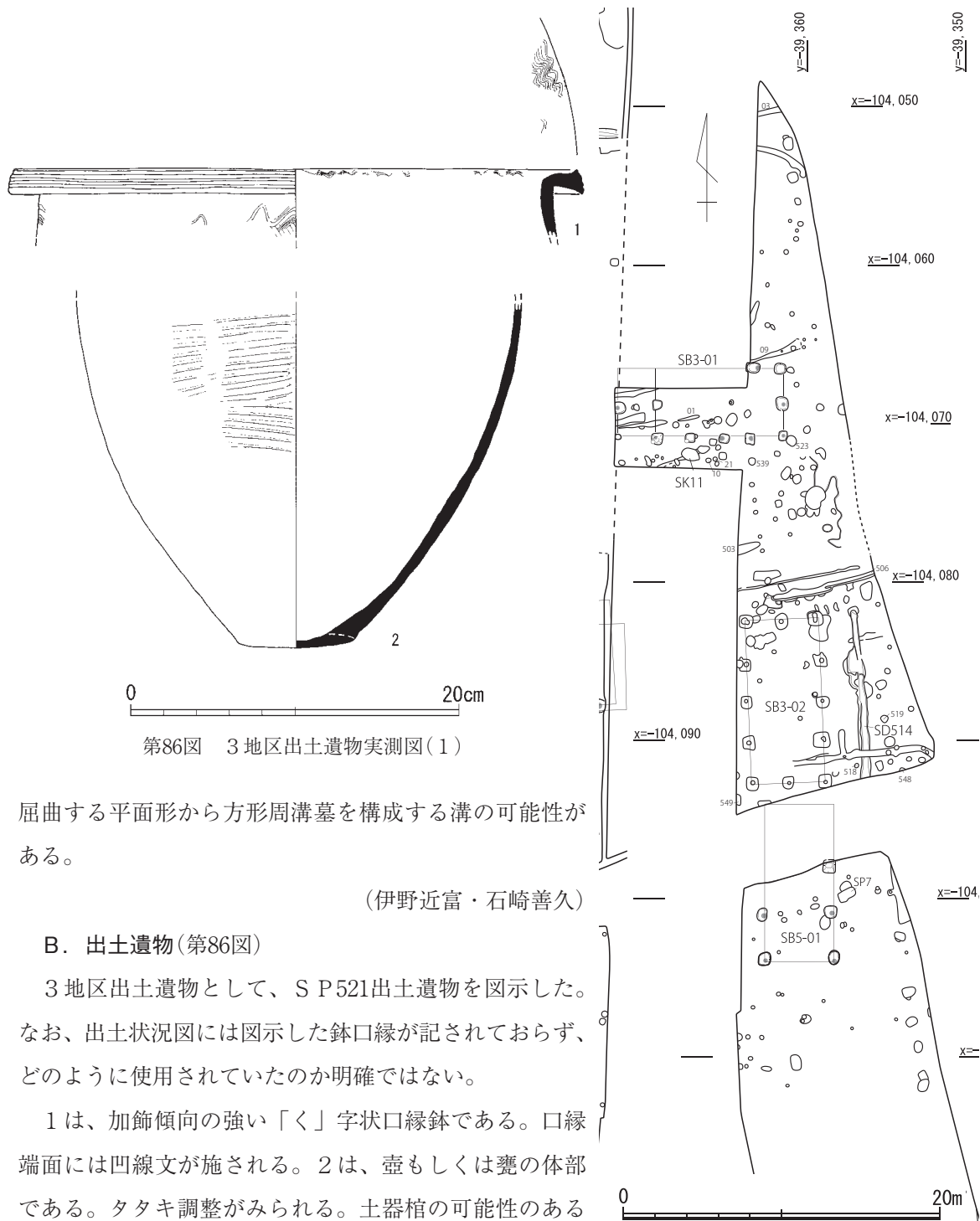
遺構の性格については明確ではないが、



第84図 3・6地区検出遺構配置図(弥生時代、1/400)



第85図 S P 521実測図(1/10)



第86図 3地区出土遺物実測図(1)

屈曲する平面形から方形周溝墓を構成する溝の可能性が
ある。

(伊野近富・石崎善久)

B. 出土遺物(第86図)

3地区出土遺物として、SP521出土遺物を図示した。
なお、出土状況図には図示した鉢口縁が記されておらず、
どのように使用されていたのか明確ではない。

1は、加飾傾向の強い「く」字状口縁鉢である。口縁
端面には凹線文が施される。2は、壺もしくは甕の体部
である。タタキ調整がみられる。土器棺の可能性のある
ものである。

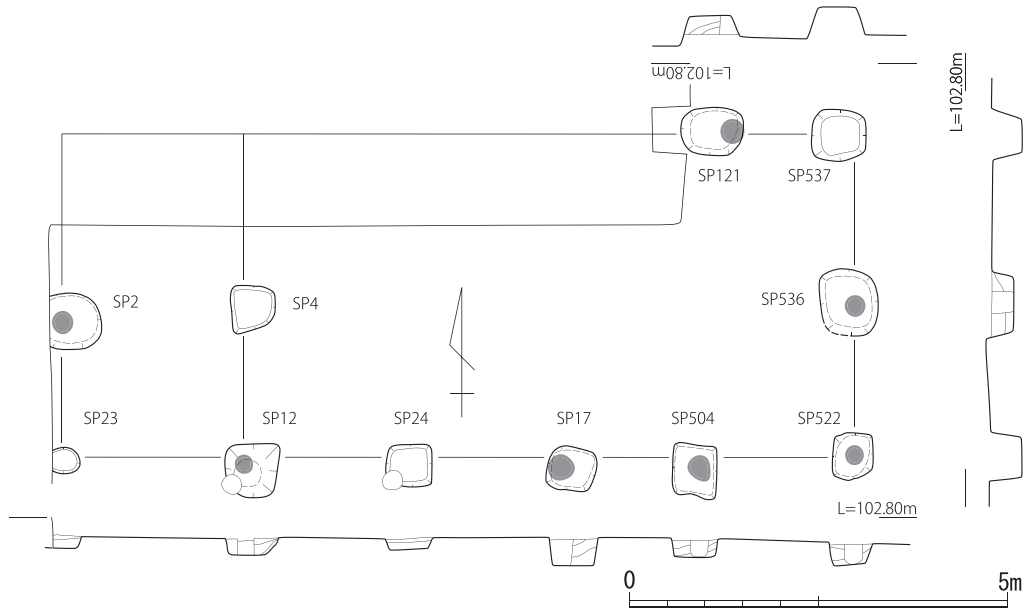
(谷上真由美)

第87図 3・6地区検出遺構配置図
(奈良時代以降、1/400)

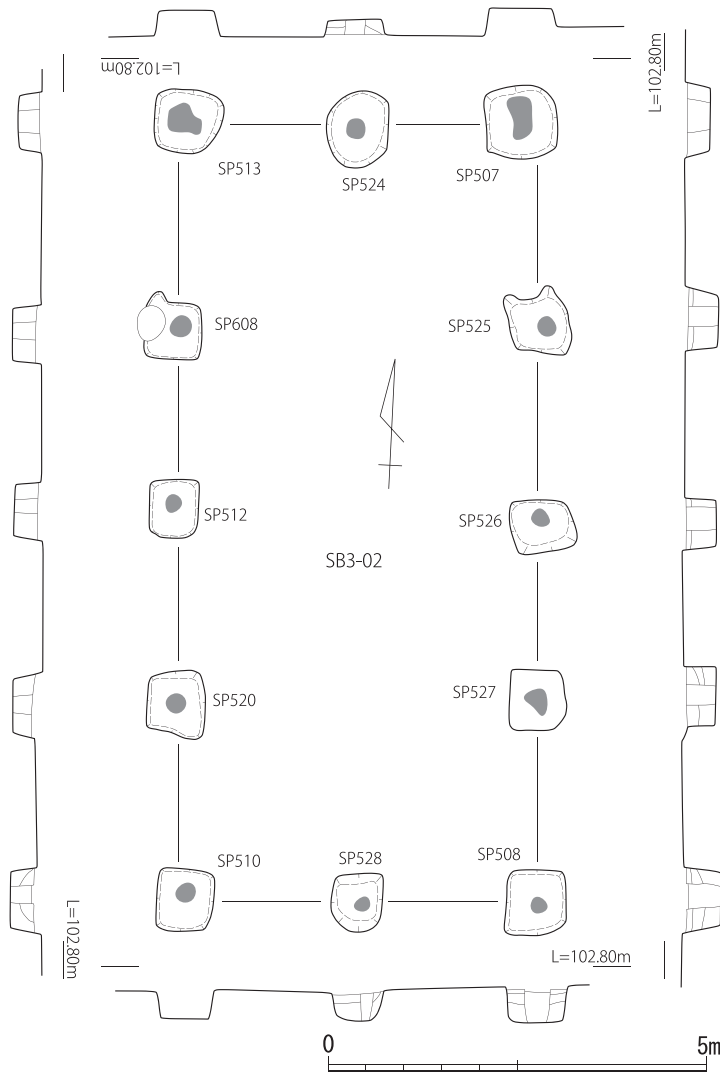
2)奈良時代以降の遺構・遺物

A. 検出遺構

15-3・6地区では、上層の遺構として奈良時代の掘立柱建物跡2棟、溝、土坑などを検出し
た。



第88図 掘立柱建物跡 S B 3-01実測図(1/100)



第89図 掘立柱建物跡 S B 3-02実測図(1/100)

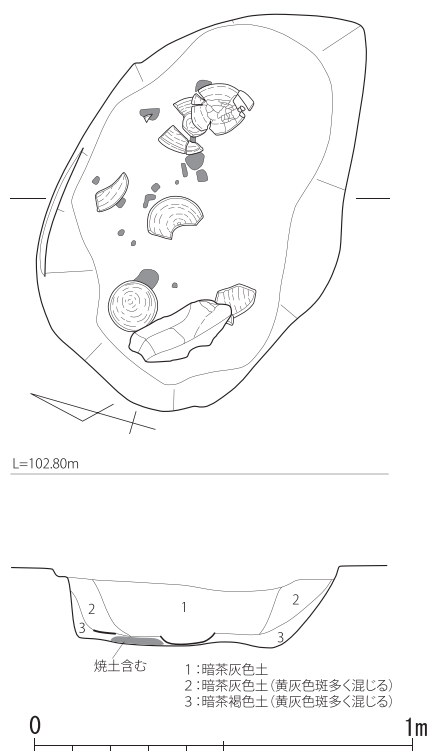
以下、主要な遺構について概観する。

掘立柱建物跡 S B 3-01 (第88図) 調査区中央並びに6地区で検出された東西方向に主軸をもつ掘立柱建物跡である。主軸はほぼ真東西にとる。

建物は西側に底をもつ構造に復原される。身舎は南北2間(4.2m)、東西4間(8m)の規模をもち、西側に1間分(2.4m)の底がつく。なお、北側の柱のうち、身舎の2間分、庇の北西隅の柱穴は調査区外のため確認することはできなかった。

身舎を構成する柱穴は方形あるいは不整形であり、規模は一辺0.6~0.8m、深さ0.2~0.5mを測る。断面形状は全て素掘りの構造をとっている。

柱痕跡の確認できるものから直



第90図 SK11実測図(1/20)

径20～30cm前後の柱が使用されていたものとみられる。なお、南側柱列は1間が均等ではなく、東から2基目と3基目の柱穴間の距離が短い。

底を構成する柱穴は平面が円形であり、特に南西隅の柱穴は直径0.3m、深さ0.2mと小規模である。柱痕跡の確認できたものは直径30cmであり、その規模は身舎と変わるものではない。

建物を構成する柱穴SP2から須恵器碗(34)、SP536から須恵器皿(6)がそれぞれ出土している。

掘立柱建物跡SB3-02(第89図) 調査区の南で検出した南北方向に主軸をもつ掘立柱建物跡である。主軸はわずかに西に振る。

規模は東西2間(4.8m)、南北4間(10.3m)を測る。建物を構成する柱穴は方形あるいは不正方形であり、規模は一辺0.7～1m、深さは0.5m前後を測る。柱痕跡の確認されたものは直径20～30cmを測る。また、北東隅の柱穴には抜き取り痕と思われる土色の変化が確認された。

建物を構成する柱穴SP507から須恵器杯(16)、須恵器碗(17)が、SP512から須恵器碗(7)が、SP528から須恵器甕(20)がそれぞれ出土している。

SD514 掘立柱建物跡SB3-02の東で確認された南北方向の素掘り溝である。幅0.7m、深さ0.2mを測る。総延長10.6m分を検出した。位置や方位からみてSB3-02に付随する施設の可能性が高い。

なお、3地区と5地区にまたがる掘立柱建物跡があるが、これについては5地区の項で述べる。

SK11(第90図) 拡張を実施した6地区で検出された土坑である。掘立柱建物跡SB3-01の南に位置している。土坑の平面は不整な長楕円形を呈し、規模は全長1m、幅0.8m、深さ0.2mを測る。角礫とともに須恵器碗(第91図25～28)、土師器杯(第91図29)が出土した。埋土の最下層には焼土が認められたが、この土坑内で火が使用された状況ではない。廃棄土坑や祭祀に伴う土坑の可能性が考えられる。

(岩松 保・石崎善久)

B. 出土遺物(第91図)

3地区出土遺物として溝、柱穴、土坑、包含層などから出土した遺物を図示した。また、遺物の出土位置については付表2に記した。

掘立柱建物跡SB3-01(34・6) 建物を構成するSP2から須恵器碗(34)、SP536から須恵器皿(6)がそれぞれ出土している。34の須恵器碗は浅い形態を示し、内外面にロクロナデの痕跡が多段状に残る。平安時代に属するものである。6の須恵器皿はやや丸みを帯びた形状を呈し、

付表2 15-3地区出土土器対照表

図番号	出土遺構	器種	図番号	出土遺構	器種	図番号	出土遺構	器種
1	SD514	須恵器杯B身	17	SP507	須恵器碗 (底部糸切り)	31	SP21	須恵器碗
2	SK523	灰釉碗				32	SP21	土師器皿
3	SK523	緑釉碗	18	SP502	黒色土器碗	33	SP10	須恵器碗
4	SP519	須恵器碗 (削出し高台)	19	SK9	瓦器碗	34	SP2	須恵器碗
5	SP549	須恵器碗 (底部糸切り)	20	SP528	須恵器甕	35	SD1	須恵器碗
6	SP536	須恵器皿	21	SD506	須恵器碗	36	SD1	須恵器碗
7	SP512	須恵器碗	22	SD506	土師器皿	37	包含層	須恵器杯G蓋
8	SP539	黒色土器碗	23	SD503	須恵器碗 (底部糸切り)	38	包含層	須恵器杯A身
9	SP539	土師器皿				39	包含層	須恵器杯A身
10	SP539	黒色土器碗	24	SD3	土師器碗 (底部糸切り)	40	包含層	須恵器碗
11	SP539	土師質羽釜	25	SK11	須恵器碗 (底部糸切り)	41	包含層	須恵器碗 (底部糸切り)
12	SP548	土師器杯	26	SK11	須恵器碗	42	包含層	黒色土器碗
13	SP548	黒色土器碗	27	SK11	須恵器碗	43	包含層	黒色土器碗
14	SP518	土師器杯	28	SK11	須恵器碗	44	包含層	瓦質羽釜
15	SP504	土師器甕	29	SK11	土師器杯	45	包含層	緑釉碗
16	SP507	須恵器杯B身	30	SP21	瓦器碗?	46	包含層	緑釉碗
						47	包含層	灰釉碗

口縁内面に段を形成する。

掘立柱建物跡S B 03-2 (16・17・7・20) 建物を構成する柱穴S P 507から須恵器杯(16)、須恵器碗(17)が、S P 512から須恵器碗(7)が、S P 528より須恵器甕(20)がそれぞれ出土している。須恵器碗(17)は糸切り底部をもつものであり、平安時代に属する。

S K 11 (25~29) 土坑内より出土した資料であり、一括性の高い一群である。25は糸切りの平高台をもつ須恵器碗であり、内外面に多段状のロクロナデの

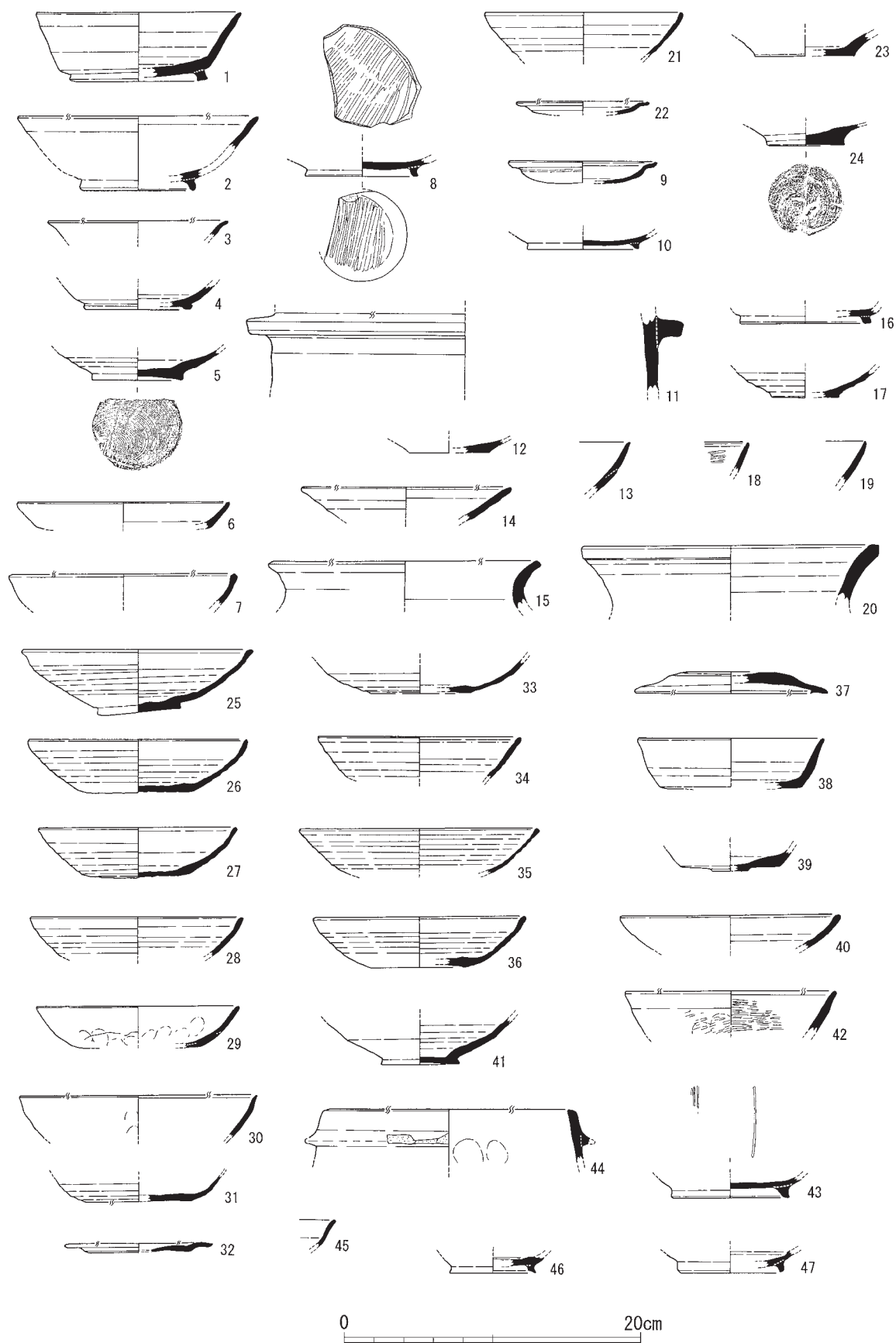
痕跡が残る。浅い形態をとる。26・27は平底の須恵器碗であり、内外面に多段状のロクロナデの痕跡が残る。器高の低い形態をとる。28も同形態の碗であるが、底部の形状については不明。29は土師器の杯であり、ユビオサエによる整形がなされている。

S K 11出土土器は掘立柱建物跡S B 3-01・02と同形態のものであり、この3つの遺構は同時期に形成もしくは廃絶したものと考えられる。とくに建物との位置関係から、掘立柱建物跡S B 3-01に伴う祭祀土坑である可能性が高い。

S D 514 (1) 1は須恵器杯Bである。体部は直線的に立ち上がる。高台は底部外縁よりやや内側に付く。奈良時代後半から末のものである。遺構の位置関係から掘立柱建物跡S B 3-02に伴うものと考えたが、建物出土の遺物より古相のものである。あるいはこの時期に建物群が形成され、建物跡出土遺物は廃絶時のものである可能性も考慮しておきたい。

その他の遺物として、この地区では奈良時代後半から平安時代のものが多数存在する。中でも黒色土器が相当数出土しており、この時期に土地利用の中心があるものと考えられる。

(石崎善久)



第91図 3地区出土遺物実測図(2)

(5) 15-4地区

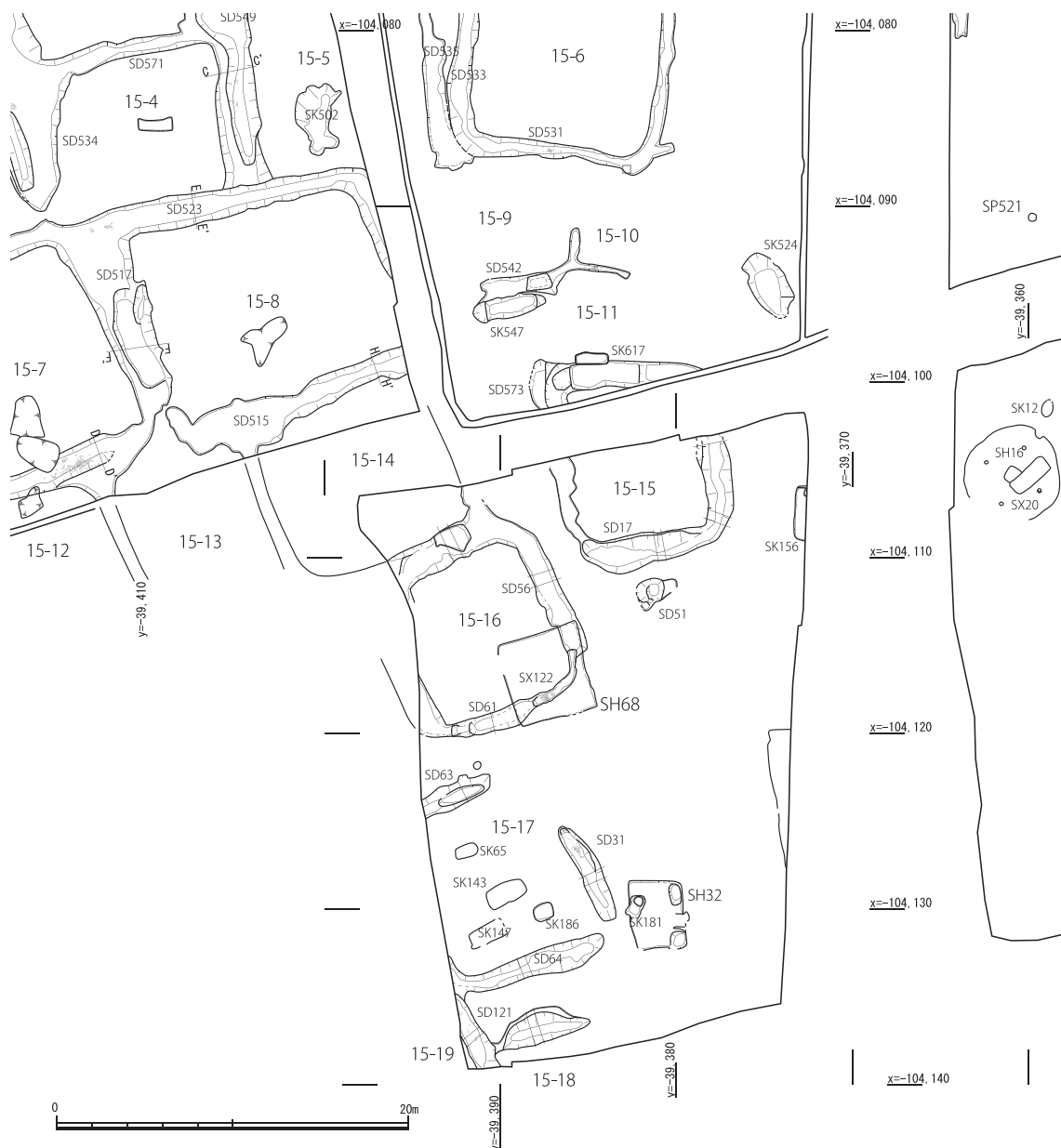
15-4地区は15-2地区の南に設定した調査区である。調査区では上層遺構として掘立柱建物跡群や土坑、性格不明のピット、溝を、下層遺構として弥生時代の方形周溝墓・土坑など、古墳時代の遺構として竪穴式住居跡2基を検出した。

1) 弥生・古墳時代の遺構・遺物

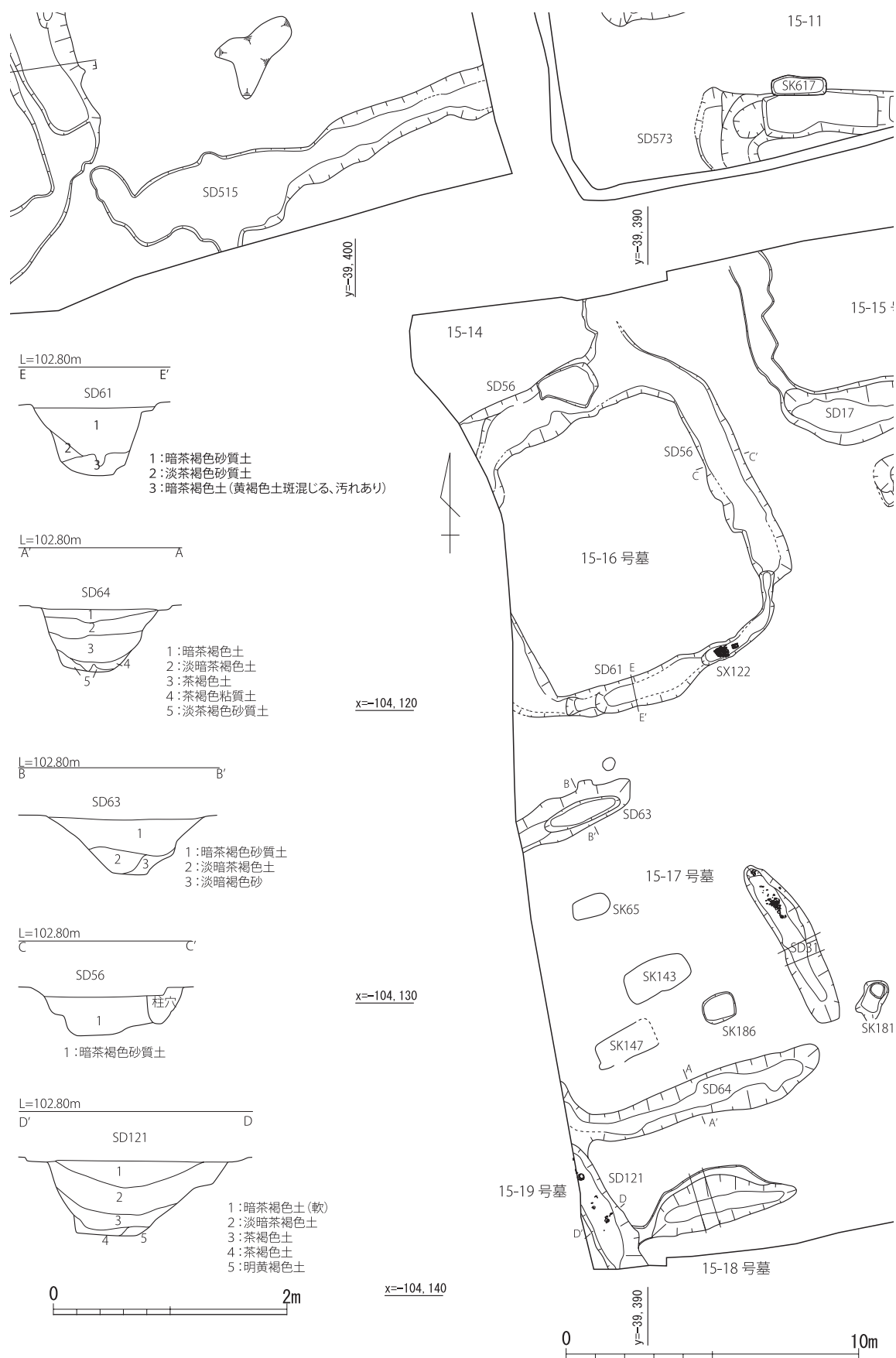
A. 検出遺構

弥生時代に属する遺構として方形周溝墓5基を調査区内で検出した。

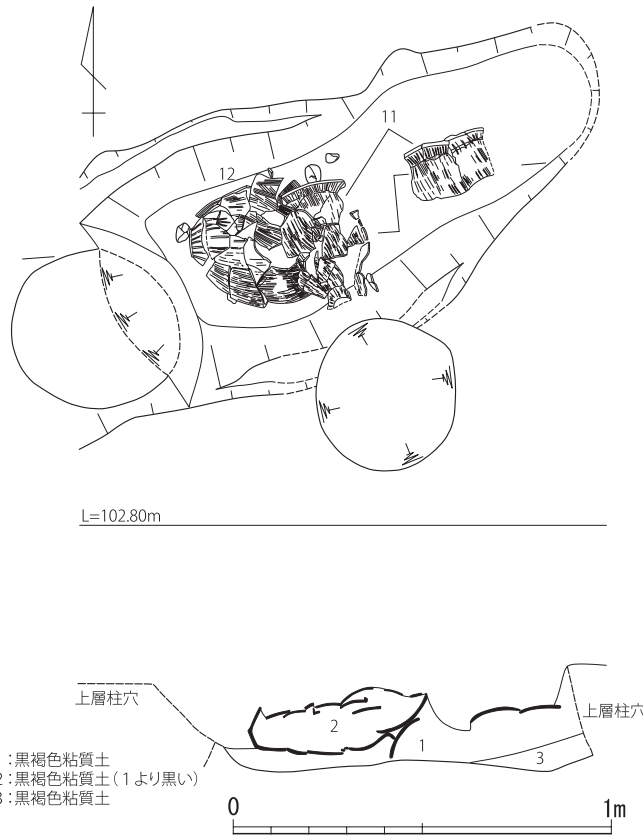
15-14号墓 調査区の北西部で確認した方形周溝墓である。15-8号墓の南SD515を北溝、SD515の南への屈曲部(幅0.9m・深さ0.14m)を西溝に、15-16号墓の北SD56(幅1.9m・深さ



第92図 4地区検出遺構配置図(弥生・古墳時代、1/400)



第93図 4地区方形周溝墓実測図(1)(平面:1/200、断面:1/50)



第94図 S X 122実測図(1/20)

0.1m)を南溝に、S D56から北側に延びる溝(幅1.1m・深さ0.07m)を東側区画溝に相当するものとして復原した。周溝墓の規模は東西11m、南北11mを測る。隣接する各周溝墓との前後関係は不明である。この周溝墓に伴う遺物も抽出できなかった。

15-16号墓 S D56を北側および東側(幅1m・深さ0.4m)の区画溝に、S D61を南側(幅1m・深さ0.6m)および西側(幅1m以上・深さ0.3m)の区画溝とする方形周溝墓である。西側は調査地区外となるが、完周する周溝である可能性が高い。周溝墓の規模は東西9.2m、南北10.3mを測る。墳丘内での埋葬施設は確認されなかった。

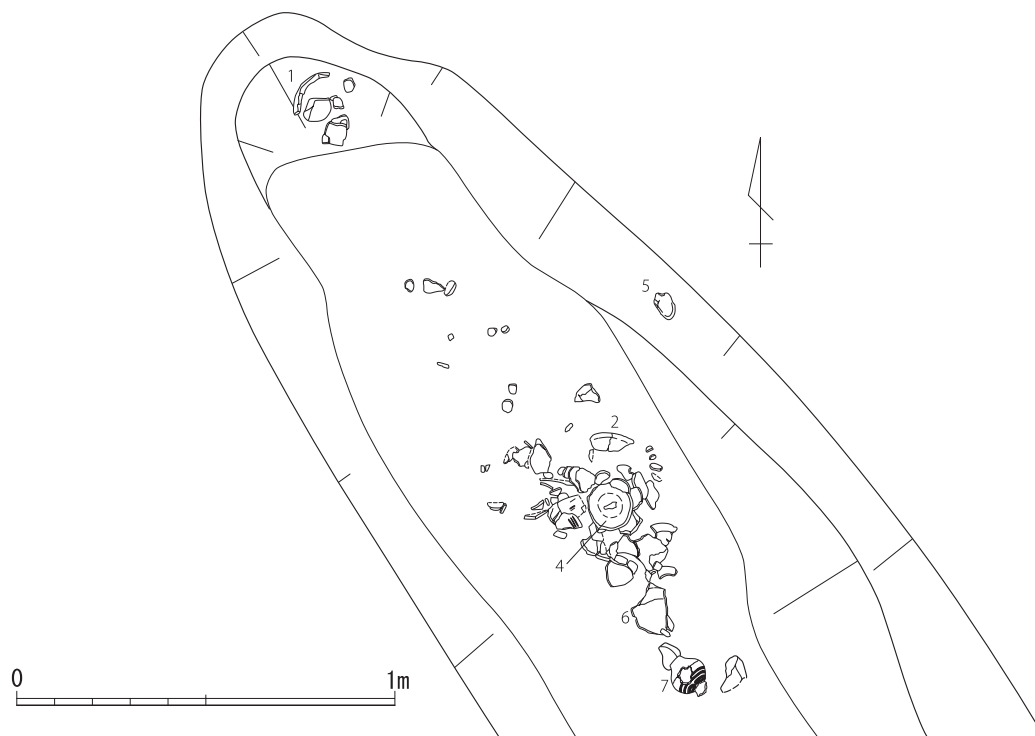
また、北側区画S D56は再掘削さ

れたかのように、溝中央部が一段深く掘り込まれている。

南側区画S D61中央部はやや深く掘削されており、この部分から壺および甕が検出された(S X 122、第94図)。両端を上層の柱穴により削平されているため、規模は明らかではないが、S D61が一定埋没した段階で再掘削された可能性が高い。壺(12)の口縁を東にむけ、横位で安置し、壺口縁下部は甕体部片を下から支えるように置いている。壺口縁は半裁した甕(11)を直交するように用いて蓋としている。同一個体の甕片がすぐ東側から検出されている。遺物の出土状況からは土器棺墓の可能性が考えられるが、掘形が大きいこと、壺が掘形床面より浮いている点や、甕とのあわせ方が例を見ないものであることから、ここでは人為的に据えられた土器埋納遺構として理解しておきたい。

15-17号墓 S D63(幅1.3m・深さ0.2m)を北側区画溝に、S D31(幅1.2m・深さ0.4m)を東側区画溝に、S D64を南(幅1.2m・深さ0.6m)および西側区画溝(幅0.6m以上・深さ0.3m以上)とする方形周溝墓である。北東隅および南東隅は周溝が途切れている。南西側は15-19号墓の東側区画溝であるS D121と接しているが切り合い関係については明瞭ではない。また、北側区画S D63は、東側が土坑状に約25cm程度、深く掘削されている場所があり、再掘削の可能性はある。周溝墓の規模は東西約10m、南北10.7mを測る。

東側区画S D31では北半部を中心に弥生土器がまとまって出土した(第95図)。壺底部(5)のように周溝外からの転落遺物も存在し、周溝墓内外から転落、投棄された遺物が混在している可能



第95図 S D31遺物出土状況図(1/20)

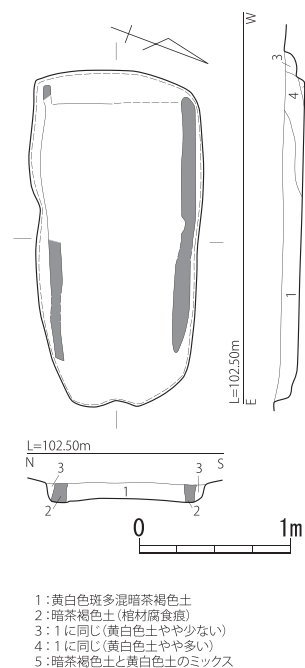
性がある。

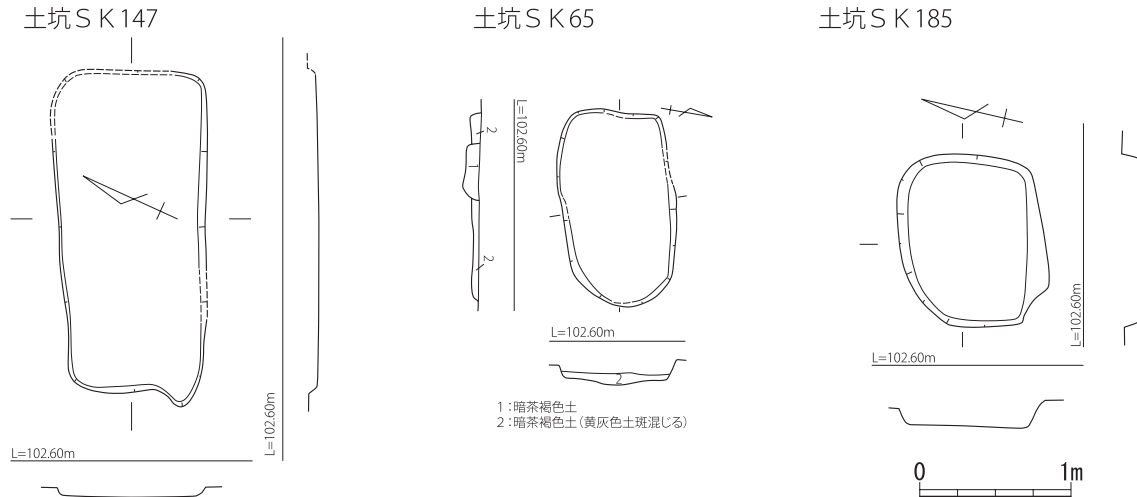
この周溝墓に伴う埋葬施設として、墳丘上で4基の土坑を想定する。いずれも東西方向に主軸をもち、ほぼ同一方位をとる。

木棺墓 S K 143 (第96図) 周溝墓墳丘中央に位置する東西方向に主軸をとる木棺直葬形態をとる埋葬施設である。墓壙の平面形は東側幅がやや狭い不整形な長方形プランを呈する。断面形態は素掘りである。木棺の痕跡は部分的にしか確認できなかったが、南側長側板の西端部が小口より突出している状況が確認でき、この状況から長側板が小口板を挟み込む箱型木棺と考える。東側小口の様相は不明であり、底板の有無についても明瞭ではない。墓壙底面は東側がわずかに高い。墓壙の規模は長軸2.2m、短軸1.1m、深さ0.13mを測る。

S K 147 (第97図) S K 143の南西で検出された平面長方形プランを呈する素掘りの土坑である。残存状況は悪いが、S K 143と主軸をほぼ同じくすることや、規模・形状から弥生時代の遺構と判断した。長軸2m、短軸1m、深さ0.06mを測る。棺の痕跡は確認できず、木棺直葬墓か土壙墓であるか不明である。

S K 65 (第97図) S K 143の北西で検出された素掘りの土坑である。主軸をS K 143と同じく東西方向にとること、上層遺構に切られること、出土遺物などから弥生時代の遺構と判断した。

第96図 S K 143実測図
(S=1/50)



第97図 S K 147・65・185実測図(1/50)

墓壇の平面形はいびつな長方形プランを呈し、長軸1.3m、短軸0.8m、深さ0.2mを測る。木棺の痕跡等は確認できず、土壇墓と考えられる。

S K 185(第97図) S K 143の南東で検出された素掘りの土坑である。主軸方位をS K 143同様、東西軸にとること、形態などから弥生時代の遺構と判断した。長軸1.1m、短軸1m、深さ0.2mを測るやや短軸に比して長軸の短い長方形プランを呈する。木棺の痕跡は確認できず、土壇墓であると判断する。

15-19号墓 15-17号墓の南西に位置する南北方向の溝、S D 121(幅1.25m、深さ0.2m)を東側区画溝とする方形周溝墓と想定した。墳丘の大部分は調査区外であり、詳細は不明である。S D 121は南側で幅を減じてさらに調査区外に延びる。

15-17号墓および、南東に想定される15-18号墓との前後関係は不明である。

遺物は周溝S D 121内から甕(19)などが出土している(第98図)。出土状況からは、北側の遺物群は墳丘からの転落、南側の遺物群は周溝東側からの遺棄の可能性がある。

15-18号墓 15-19号墓の東側区画S D 121から東へ突出する溝(幅2m、深さ0.7m)を北側区画溝に西側は15-19号墓の東側区画溝と共有する方形周溝墓として考える。大部分が調査区外のため、詳細は不明である。

15-15号墓 4地区北側中央で検出した。2地区で検出したS D 573を北側区画溝とし、4地区のS D 17により区画される。周溝は一部未調査であるが、完周するものと推定される。S D 17は東で幅1.5m・深さ0.3m、南側で幅1.6m・深さ0.2m、西側で幅0.9m・深さ0.1mを測る。周溝墓の規模は東西8.8m、南北10.7mを測る。

北側区画S D 573は溝底面が再掘削された状況を呈しており、北側に接する方形周溝墓15-11号墓の盛土を確保するために溝内が掘削された可能性を考えておきたい。

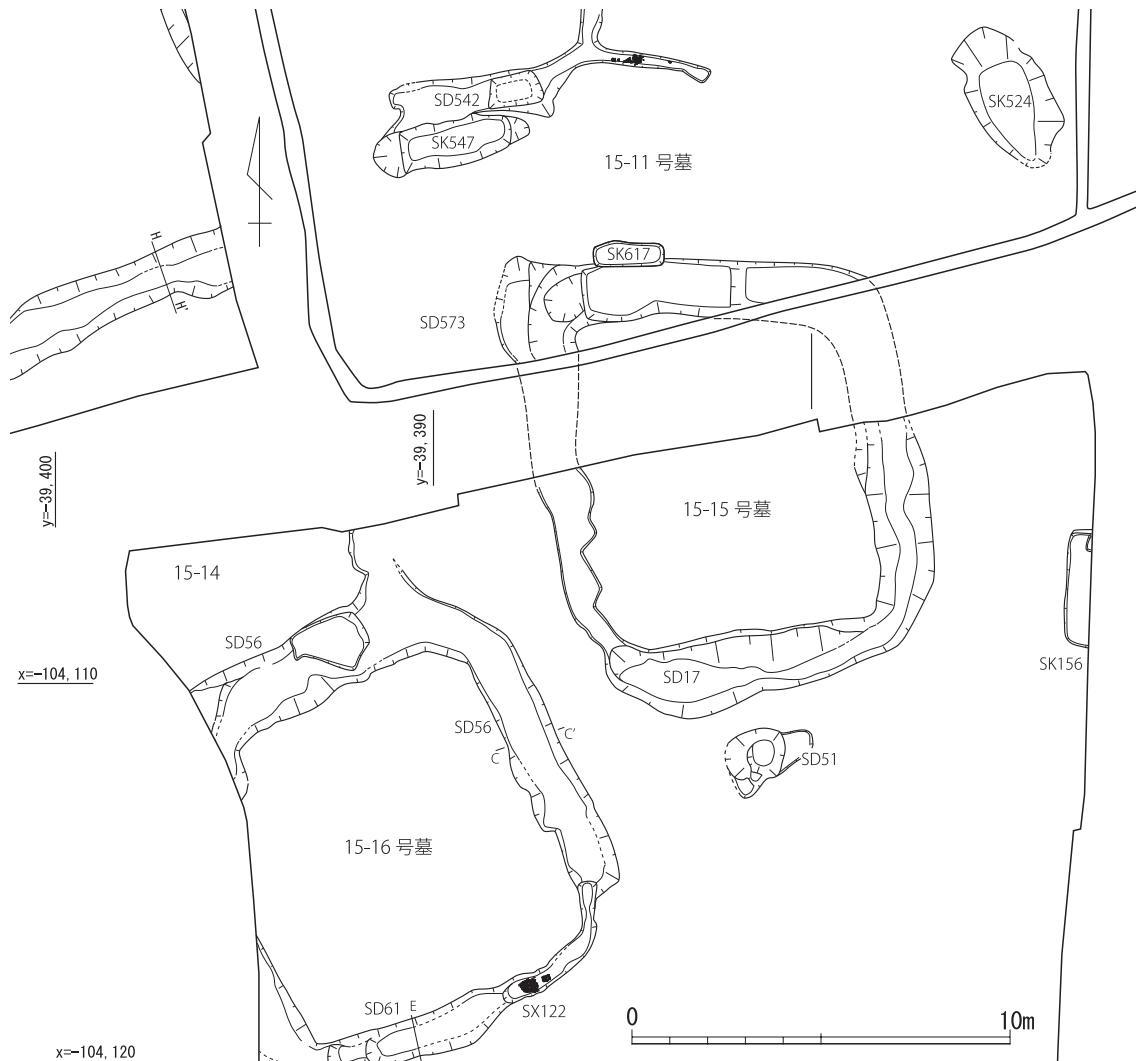
また、S D 17は西側部分が他の部分より浅いのが特徴的である。

以上の方形周溝墓の他に、4地区では弥生時代の遺構として土坑が検出されている。

S D 51 15-15号墓の南で検出した不整形な土坑である。埋土中からは弥生土器のみが出土



第98図 S D121遺物出土状況図(1/20)



第99図 4地区方形周溝墓実測図(2)(平面:1/200、断面:1/50)

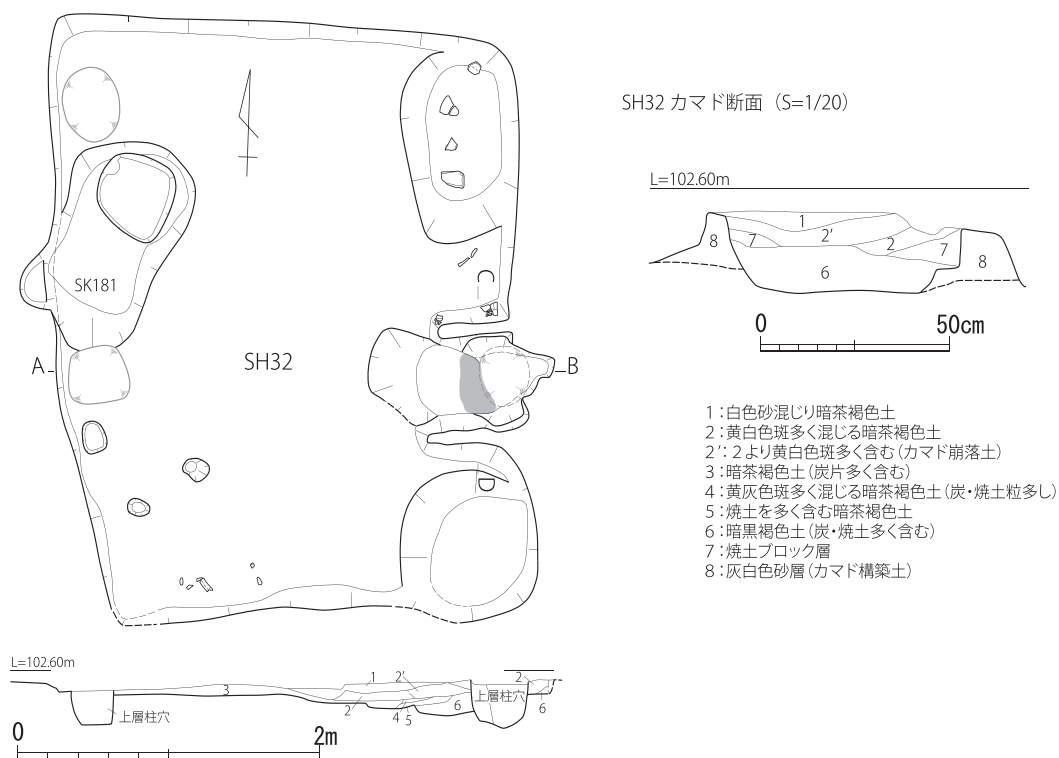
している。長軸2.4m、短軸1.4m、深さ0.27mを測る。

SK156 調査区北東で検出した土坑である。大部分が調査区外のため、遺構の性格などは不明である。南北3m、東西0.6m以上、深さ0.15mを測る。

SK181 竪穴式住居跡SH32床面で検出された土坑である。不整形な長方形プランを呈し、床面は一段深く掘削されている。長軸1.3m、短軸0.7m、深さ0.4mを測る。

4地区では弥生時代の遺構のほかに、古墳時代の遺構として2基の竪穴式住居跡を検出した。

竪穴式住居跡SH32(第100図) 4地区南部で検出した竪穴式住居である。平面は南北にやや長い長方形プランを呈する。規模は東西3m、南北3.8m、深さ0.15mを測る。住居内の施設として、北東および南東部で土坑を、東辺中央でカマドを検出した。周壁溝や支柱穴は確認できない。造り付けのカマドは第100図8層を盛り上げて壁体とし、燃烧部を床面より深く掘り下げている。支柱石等は検出されていないが、上層柱穴によりカマド内部が攪乱されているため、本来の有無は明らかではない。遺物はカマド周辺から土師器甕(第114図1)が出土している。飛鳥時代の竪穴式住居跡と考える。



第100図 竪穴式住居跡 S H32実測図(1/50)

竪穴式住居跡SH68(第101図) 4地区中央で検出した南北方向に主軸をもつ竪穴式住居跡である。平面は方形プランを呈し、規模は南北4.8m、東西4.5m、深さ0.1mを測る。住居内の施設は明確には確認されておらず支柱穴も特定することはできなかった。

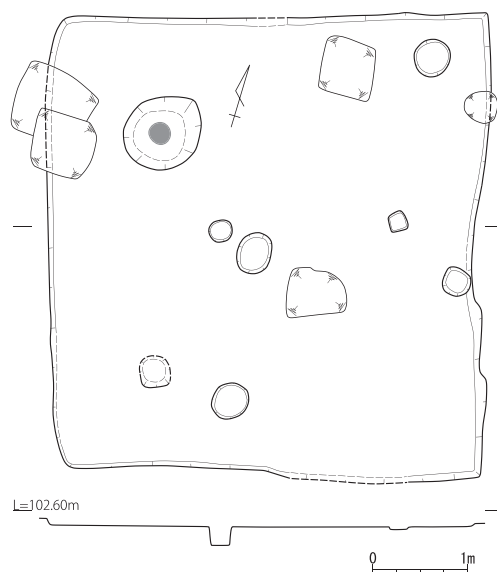
埋土中から若干の土師器・弥生土器が出土している。周溝墓を切っていること、カマドがないこと、須恵器が出土していないことと17次調査の成果から古墳時代前期の竪穴式住居跡の可能性が高い。

(岩松 保・石崎善久)

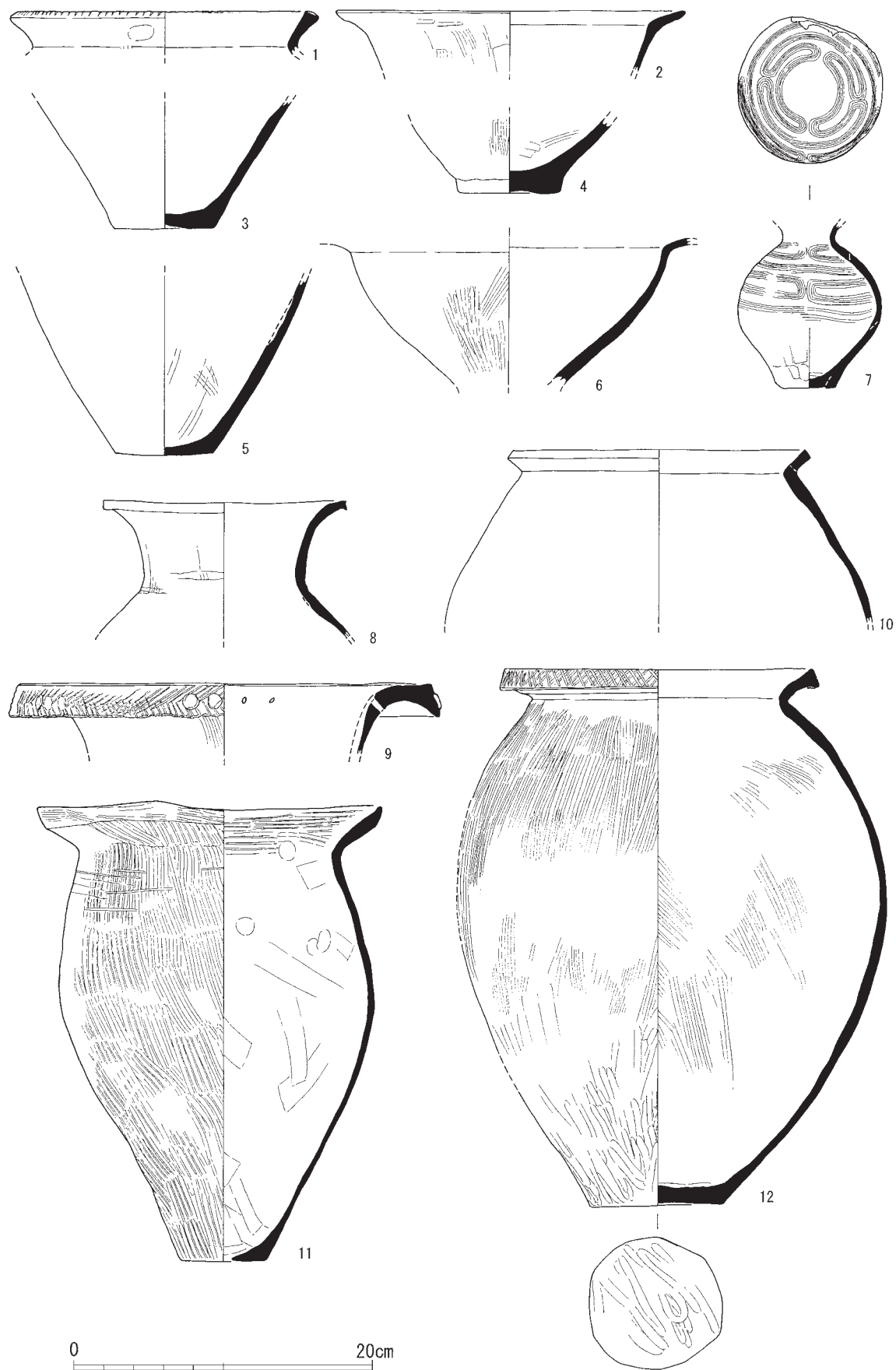
B. 出土遺物(第102・103図)

4地区出土遺物として、弥生土器を図示した。なお、竪穴式住居跡 S H32の出土土器は4地区の奈良時代以降の土器と共に報告する。

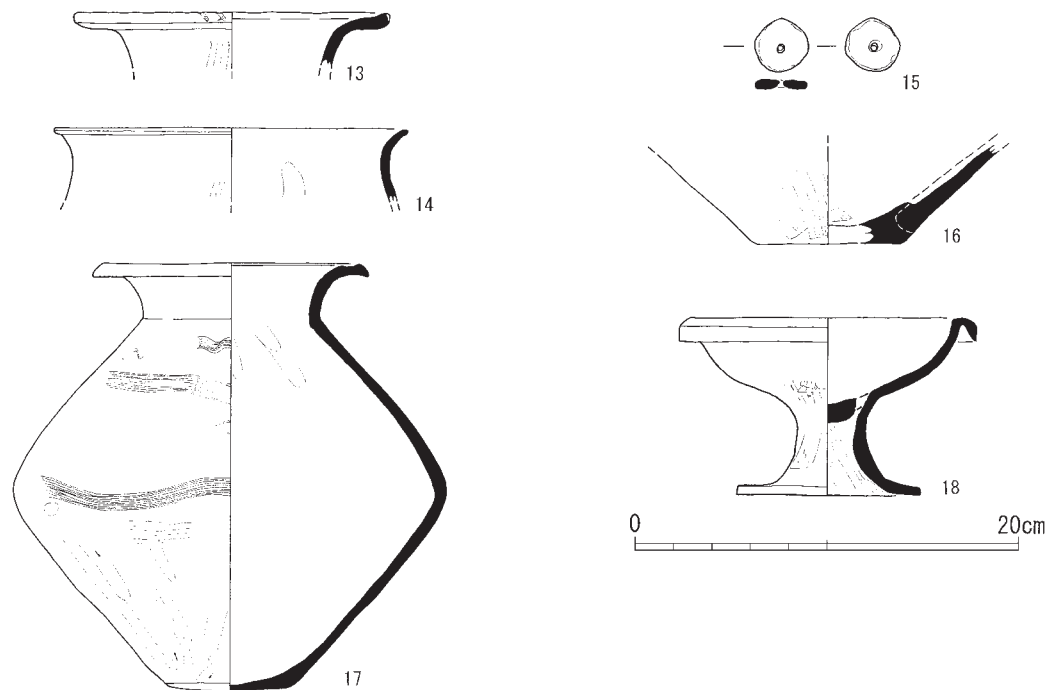
S D31(1～7) 土器片が多く出土した。7の細頸壺と思われる壺体部は頸部以上を欠き、全容が分からない。体部は、最終的に一周する櫛描流水文で飾られる。供献土器であると考えられるものである。甕は、「く」字状口縁(1)と、全く張りのない折り曲げ口縁甕(2)がある。1は、口縁端部の形状から、15-1地区 S K420などにみられたようなものと類似しており、体部が大きく張る形状のものであると考えられる。6は、水平口縁高杯の杯部である。口縁内に突帯はな



第101図 竪穴式住居跡 S H68実測図(1/80)



第102図 4地区出土遺物実測図(1)



第103図 4地区出土遺物実測図(2)

く、水平部も折り曲げて作られていることから、出現したばかりのものと考えられる。

SD121(8~10) 口縁端部に面をもつ無文の広口壺(8)と、口縁端部が大きく垂下し、そこを櫛状工具による綾杉文と円形浮文で飾る大型の広口壺(9)がある。9は2個一組の紐孔をもつ。10の甕は、短い口縁をもち、体部が大きく張る形状の「く」字状口縁甕である。

SX122(11・12) 11は、近江系の受口状口縁甕である。外面ハケメ調整が非常に粗く、胎土も褐色で大粒の石英や長石が目立つということから、明らかな搬入品であることがわかる。12は、短い口縁部をもつ広口壺である。外面をハケメ調整した後、下半をミガキ調整を施す。底面にもミガキ調整がみられる。口縁端面には1本描きで表現された斜格子文が飾られる。胎土は在地のものと変わらない。11の体部下半が12の口縁部を覆うようにして出土しており、同一時期に据え付けられたものである。

SD64(13~16) 13の広口壺は、頸部の途中で屈曲して折れ曲がり、広がる形状である。口縁端面に刻目をもつ。14は折り曲げ口縁甕である。16は大型の壺の底部であると考えられる。土製円盤もみられる(15)。

SD17(17・18) 広口壺と高杯を掲載した。17は、体部が中位で強く張る形状で、南丹波ではあまりみられない形状である。体部は恐らく、櫛描波状文と直線文が交互に施されていたものと思われる。最上段は波状文である。体部下半の調整は、ミガキともケズリともつかない。18は、形骸化したような小型の水平口縁高杯である。口縁端が全くのびず、すぐに垂下する。内外共にケズリ調整が施される。

(谷上真由美)

2).奈良時代以降の遺構・遺物

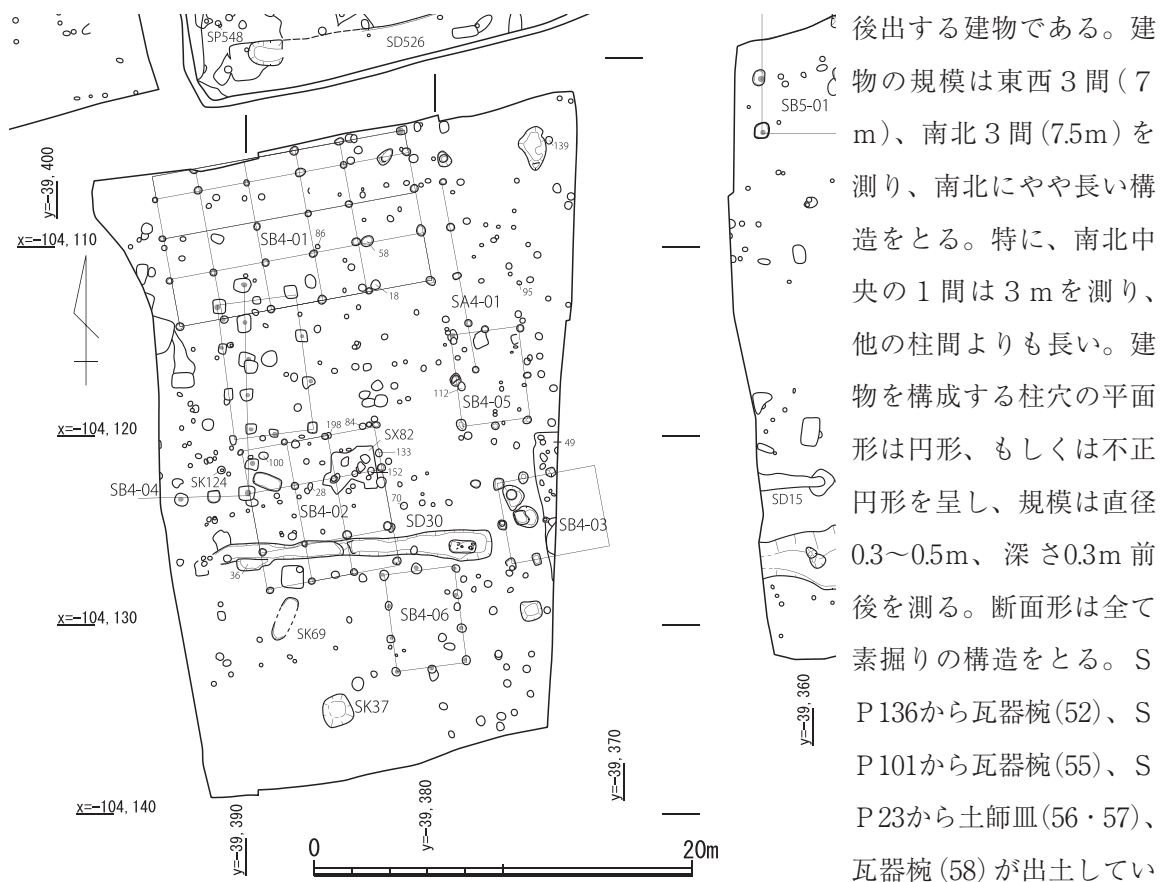
A. 検出遺構

15-4地区では奈良時代以降の遺構として、掘立柱建物跡6棟、柵・溝・土坑などを検出した。奈良時代以降の遺構密度は1地区同様高いといえる。

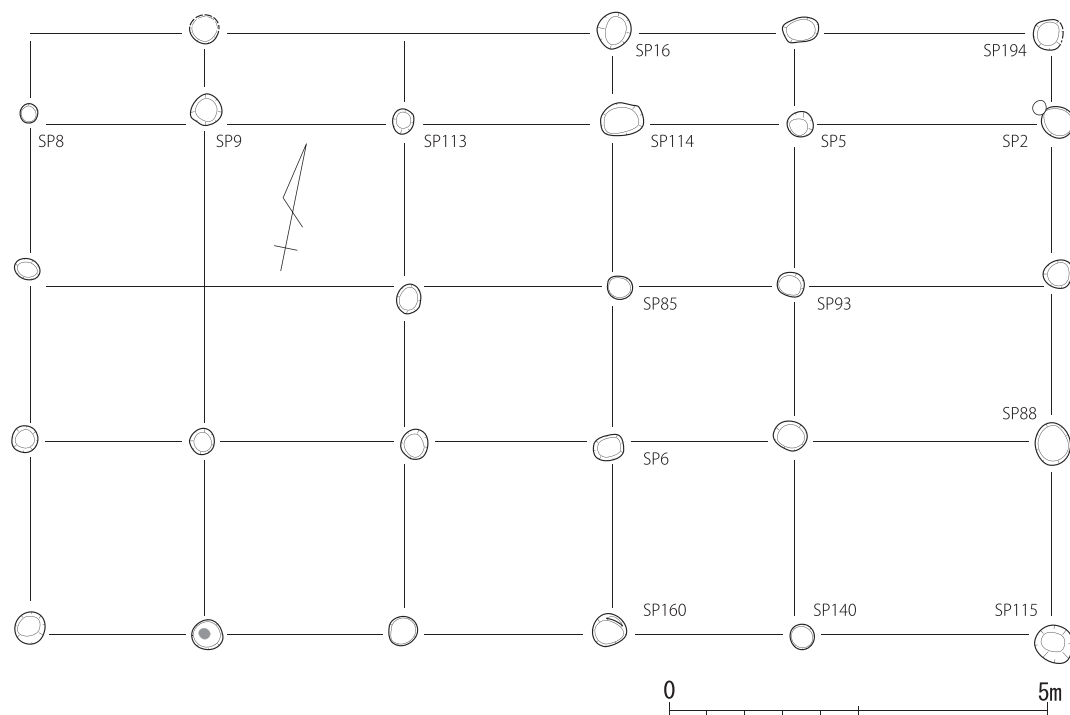
掘立柱建物跡SB4-01(第105図) 調査区北部で検出した東西棟の、総柱掘立柱建物跡である。規模は東西5間(13.5m)、南北4間(7.9m)を測る。主軸は座標軸より西に振っている。北側の1間分の柱穴間距離は、他の柱穴間距離に比して1.2mと短く、庇もしくは縁などの可能性がある。また、東側1間分は他の柱間に比して長く、3.4mを測る。建物を構成する柱穴の平面形は円形、もしくは不正円形を呈し、規模は直径0.2~0.5m、深さ0.1~0.3mを測る。断面形は全て素掘りの構造をとる。柱痕跡の確認されたものから径15cm程度の柱が使用されていたものと考えられる。SP8から緑釉椀(39・40)、灰釉椀(41)、SP114から須恵器椀(30)、SP5から須恵器杯(42)、SP140から緑釉椀(43)が出土している。

また、この掘立柱建物跡の東で検出された柵SA4-01は掘立柱建物跡4-SB01と方位、柱間を揃えており、この建物に付属する施設であると考ええる。SA4-01は南北軸に主軸をとり、4間(10m)の規模をもつ。

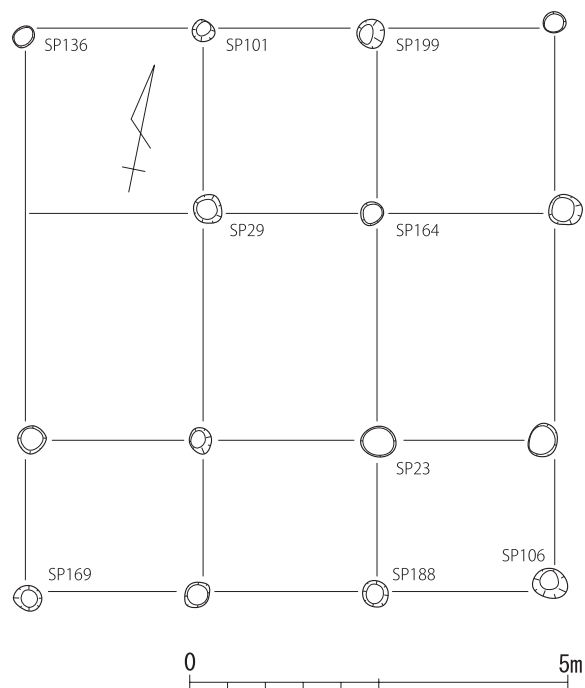
掘立柱建物跡SB4-02(第106図) 調査区の中央で検出された総柱の掘立柱建物跡である。主軸は掘立柱建物跡SB4-01と同一方位をとる。また、SD30を柱穴が切っており、SD30に



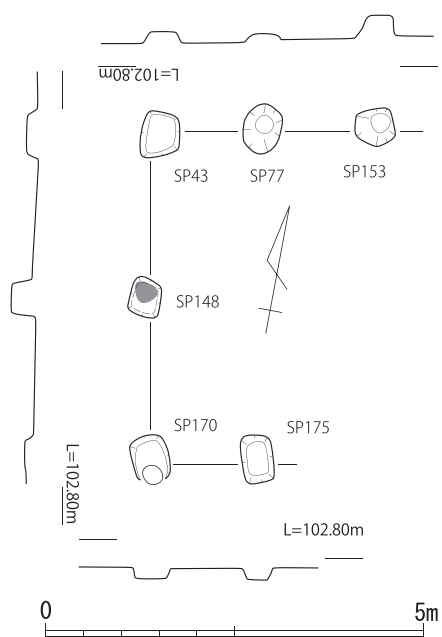
第104図 4地区検出遺構配置図(奈良・平安時代、1/400)



第105図 掘立柱建物跡SB 4 - 01実測図(1/100)



第106図 掘立柱建物跡SB 4 - 02実測図(1/100)



第107図 掘立柱建物跡SB 4 - 03実測図(1/100)

掘立柱建物跡 S B 4 - 03 (第107図)

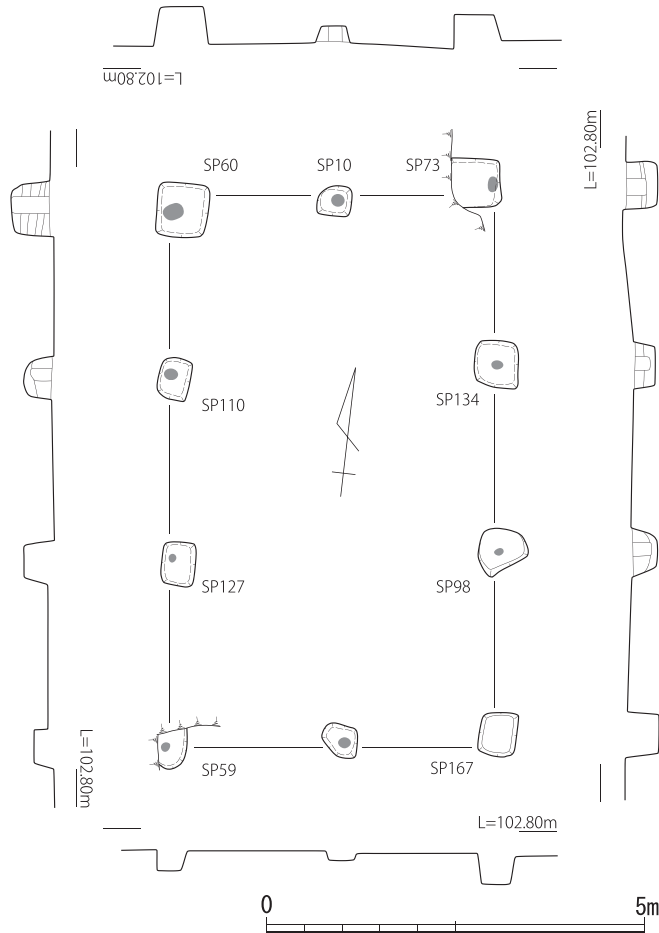
調査区南東部で検出された掘立柱建物跡である。調査区外に延びるため、全容は不明である。南北2間(4.4m)、東西2間(3m)以上を測る。柱穴は方形もしくは不正方形であり、規模は一辺0.4~0.7m、深さ0.15~0.3mを測る。柱痕跡の確認されたものから、径約30cm程度の柱が使用されていたものと考えられる。図示し得る遺物はない。

掘立柱建物跡 S B 4 - 04 (第108図)

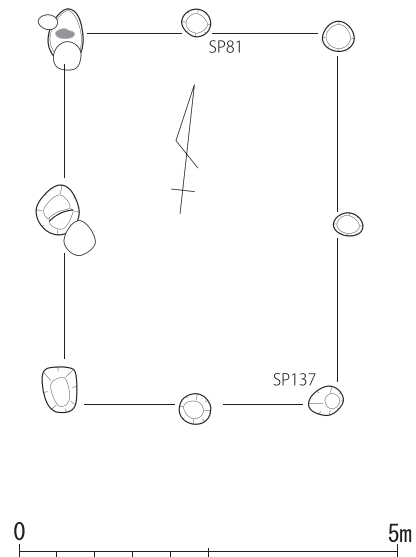
調査区中央より北東寄り、掘立柱建物跡 S B 4 - 01と重複する掘立柱建物跡である。直接的な切り合い関係がないため、遺構から前後関係を示すことはできない。建物の規模は東西2間(4.3m)、南北3間(7.3m)を測る。主軸はわずかに西に振る。建物を構成する柱穴は方形もしくは不正方形であり、規模は一辺0.4~0.7m、深さは0.15~0.5mを測る。断面形は素掘りのものが大部分である。また、南北両梁行中央の柱穴が小規模な点が特徴的である。S P 167から須恵器杯(28)が出土している。

掘立柱建物跡 S B 4 - 05 (第109図) 調査区中央の東寄りから検出された南北方向に主軸をもつ掘立柱建物跡である。主軸方位は、掘立柱建物跡 S B 4 - 04とほぼ一致する。また、柵 S A 4 - 01と重複するが、直接的な切り合い関係はない。規模は東西2間(3.6m)、南北2間(4.9m)を測る。建物を構成する柱穴は、円形もしくは不正円形のものが大部分であるが、一部、不正方形のものもみられる。柱穴の規模は径0.3~0.6mと幅があり、特に、西側桁行の柱穴は他に比して大型である。柱痕跡の確認された北西隅柱穴では、やや不整ながら径20cmの柱が使用されていたものと考えられる。図示しうる遺物はない。

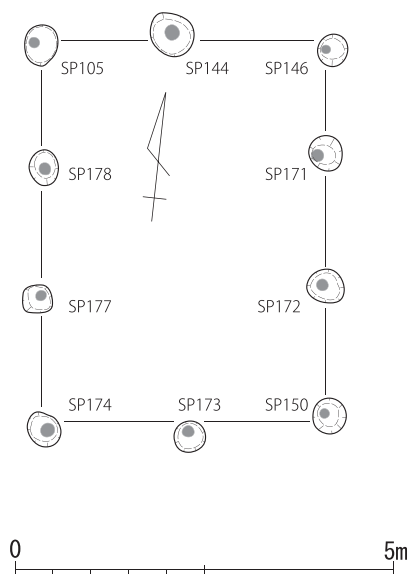
掘立柱建物跡 S B 4 - 06 (第110図) 調査区南東部で検出した南北方向に主軸をもつ掘立柱建



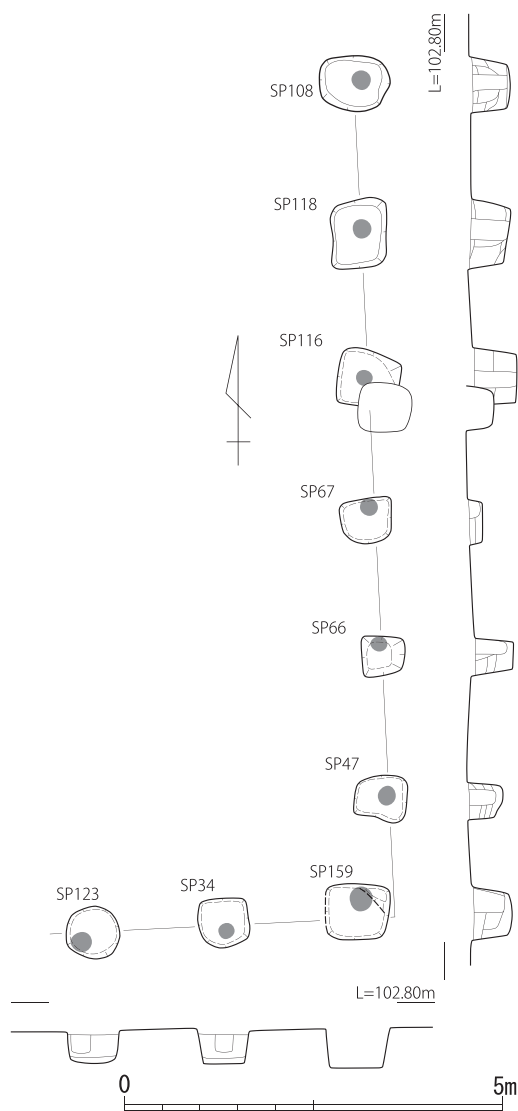
第108図 掘立柱建物跡 S B 4 - 04実測図(1/100)



第109図 掘立柱建物跡 S B 4 - 05
実測図(1/100)



第110図 掘立柱建物跡SB 4-06実測図(1/100)



第111図 柱列SB 4-07実測図(1/100)

物跡である。主軸方位は掘立柱建物跡SB 4-04・05と同一方位をとる。また、竪穴式住居跡SH32を切る。建物の規模は南北3間(5m)、東西2間(3.7m)を測る。建物を構成する柱穴は、平面形は円形もしくは不正円形であり、規模は径0.4～0.6mを測る。断面形は素掘りである。全ての柱穴で柱痕跡を確認した。柱痕跡の規模から、この建物に使用されていた柱は径20cm前後と考えられる。図示しうる遺物はない。

柱列SB 4-07(第111図) 調査区北西部で検出した柱穴群である。柱穴の規模や形状から一連の施設と考えるが、北東の柱穴から西あるいは北にも、連続する遺構がないため、掘立柱建物跡ではない可能性がある。便宜上、SBの遺構略号を付して報告する。

遺構は東西2間(3.7m)以上、南北6間(11.2m)を確認した。柱穴は平面方形もしくは不正方形が大部分であるが、円形のものも認められる。柱穴の規模は一辺0.6～0.9m、深さ0.2～0.6mを測る大型の柱穴から構成される。主軸方位はわずかに西に振っている。全ての柱穴から柱痕跡が検出されており、使用された柱は径25cm前後のものであったと考える。図示しうる遺物はない。

遺構の性格については、掘立柱建物跡の可能性もあるが、何らかの施設を圍繞する柵である可能性も考慮しておきたい。

SD30(第104・112図) 調査地南で検出された東西方向の溝である。幅0.8m、深さ0.2m、全長15mを測る。主軸方位はほぼ真東西に近い。この溝は建物群に伴う区画溝の可能性が高いと考える。また、隣接する5地区で検出したSD13と有機的な関連があると考えられるが、この点については後述する。

溝の東端では土坑(第113図)を検出した。溝の底面から掘り込まれており、平面は両端の丸い長方

形プランを呈する。規模は長さ1.4m、幅0.64m、深さ0.3mを測る。

土坑内からは杯身(20・22)とともに馬の歯牙と思われる動物遺体を検出した。この遺構の性格については祭祀土坑と考える。

S K37(第113図) 調査区南端で検出した素掘りの土坑である。平面は方形プランを呈し、一辺1.6mを測る。深さは2mを測り、埋

土の観察などから井戸と判断する。

遺物は須恵器を中心とした遺物(6～11)が出土している。

(岩松保・石崎善久)

B. 出土遺物(第114・115図)

4地区出土遺物として、土坑、溝、柱穴などから出土した遺物を図示した。なお、竪穴式住居跡S H32の遺物もここで概要を述べる。

1はS H32出土の土師器甕である。直立気味に立ち上がる口縁をもち、口縁端部は内面に屈曲させる。古墳時代後期から飛鳥時代に属するものと考え。

2～5はS K69出土遺物である。2は杯Bの底部、3は内面に暗文をもつ土師器杯の小片、4は小型の土師器甕であり、あまり開かない口縁をもつ。5は大きく口縁の開く土師器甕である。

6～11はS K37出土遺物である。6は浅い椀形の須恵器杯身である。7はやや大型の須恵器椀である。8は浅い椀形を呈し、高台をもたない須恵器杯である。9は灰釉陶器皿である。10は須恵器小型壺の口縁である。11は軟質の焼成で瓦質土器のような質感をもつ壺底部である。出土層位が明らかでなく混入品、あるいは最終埋没時の遺物の可能性がある。

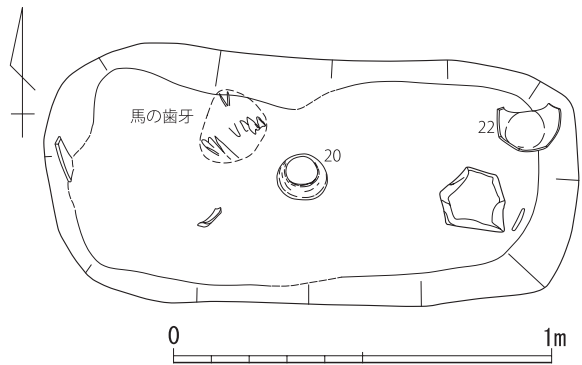
12はS K36出土の須恵器杯Aの底部と思われる個体である。この遺構自体は明瞭な掘形がなく、包含層として捉えるものであろう。

13・14はS K124出土遺物である。13は糸切り底部をもつ須恵器椀である。14は須恵器鉢であり口縁部を拡張する。また、外面のロクロナデが多段状に残される。

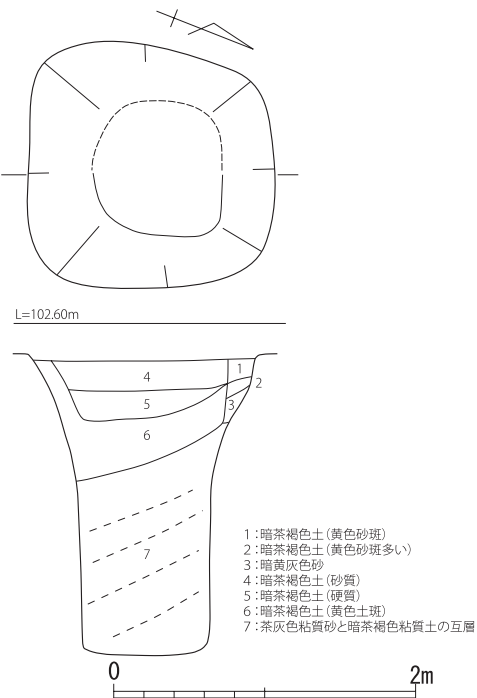
15～17はS X82出土の瓦器椀である。16の高台は断面三角形を呈する。

18・27はS D49から出土した須恵器杯H蓋と土師器甕である。

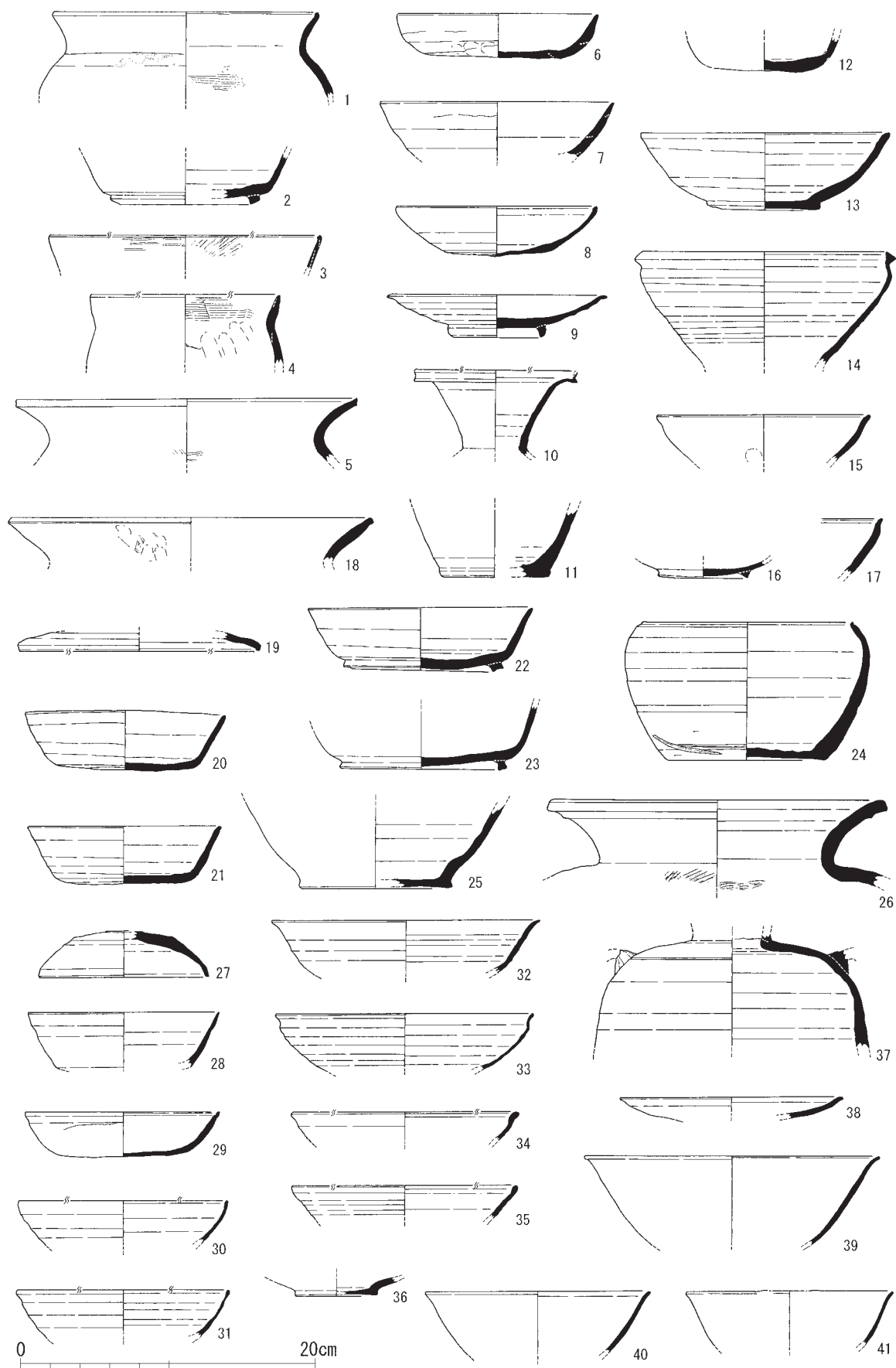
19～26は区画溝とみられるS D30出土遺物である。20・22は馬の歯牙と供に土坑内から出土した須恵器である。この溝の出土遺物には奈良時代後半に属する遺物が多い。後述する5地区のS



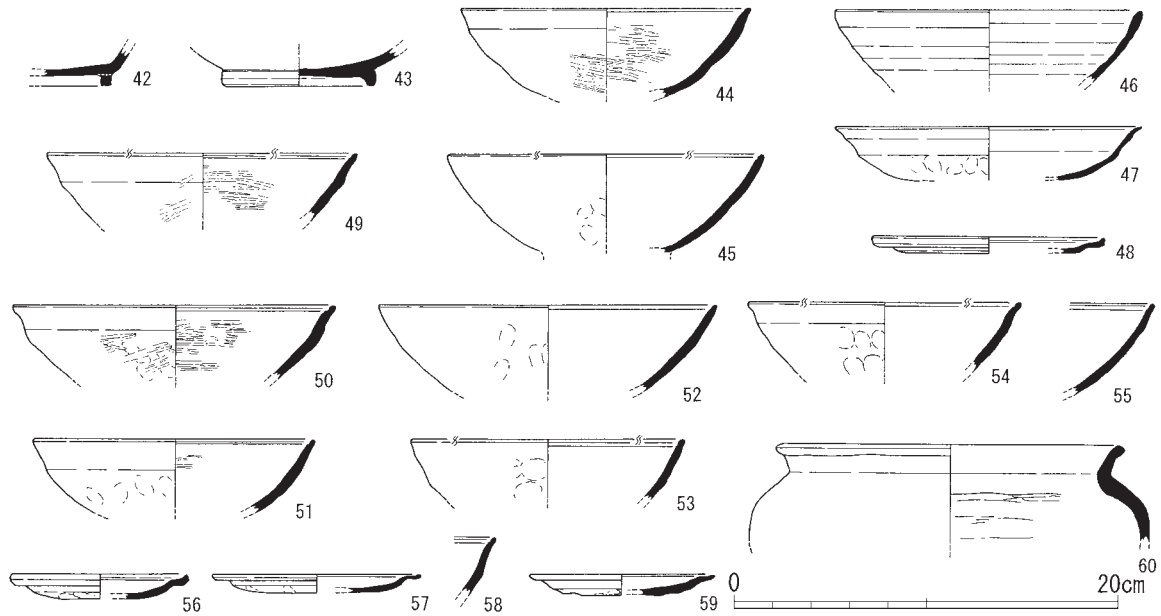
第112図 S D30東端土坑遺物出土状況平面図(1/20)



第113図 S K37実測図(1/50)



第114図 4地区出土遺物実測図(3)



第115図 4地区出土遺物実測図(4)

D13との同時併存に矛盾はないものと判断する。25は糸切り底をもつ須恵器壺であり、溝の埋没時期を示す資料であろう。

28～60はピットからの出土遺物である。付表3に対照表を付した。このうち、建物に伴う遺物は以下のとおりである。

掘立柱建物跡S B 4 -01ではS P 8から緑釉陶器碗(39・40)、灰釉陶器碗(41)、S P 114から須恵器碗(30)、S P 5から須恵器杯(42)、S P 140から緑釉陶器碗(43)が出土している。

掘立柱建物跡S B 4 -02ではS P 136から瓦器碗(52)、S P 101から瓦器碗(55)、S P 23から土師皿(56・57)、瓦器碗(58)が出土している。

掘立柱建物跡S B 4 -04ではS P 167から須恵器杯(28)が出土している。

以上のように、総柱建物であるS B 4 -01・02は平安後期から末頃の造営とみられ、その他の建物については、S B 4 -04と主軸を同じくすることから、奈良時代後半を中心とする年代を考えておきたい。S D 30も同時期

付表3 15-4地区柱穴出土遺物対照表

のものである。

また、この地区では瓦器碗が目立つことも注目される。時塚遺跡における平安時代後期から中世にかけての集落域のあり方を検討する上で重要な資料といえよう。

(石崎善久)

図番号	出土遺構	器種	図番号	出土遺構	器種	図番号	出土遺構	器種
28	SP167	須恵器杯A身	38	SP58	緑釉皿	50	SP198	瓦器碗
29	SP100	土師器杯	39	SP 8	緑釉碗	51	SP198	瓦器碗
30	SP114	須恵器碗	40	SP 8	緑釉碗	52	SP136	瓦器碗
31	SP139	須恵器碗	41	SP 8	灰釉碗	53	SP84	瓦器碗
32	SP95	須恵器碗 (無釉陶器か)	42	SP 5	須恵器杯B身	54	SP23	瓦器碗
33	SP86	須恵器碗	43	SP140	緑釉碗	55	SP101	瓦器碗
34	SP112	須恵器碗	44	SP152	黒色土器碗	56	SP23	土師器皿
35	SP18	須恵器碗	45	SP152	瓦器碗	57	SP23	土師器皿
36	SP18	須恵器碗 (糸切り底)	46	SP152	土師器碗	58	SP23	瓦器碗
37	SP28	須恵器耳壺	47	SP152	土師器杯	59	SP70	土師器皿
			48	SP152	土師器皿	60	SP23	土師器壺
			49	SP133	黒色土器碗			

京都府遺跡調査報告集 第135冊

平成21年3月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社
〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141